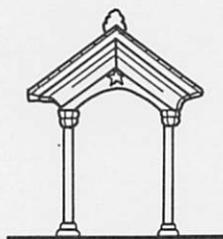


市立函館博物館
研究紀要

第 1 号

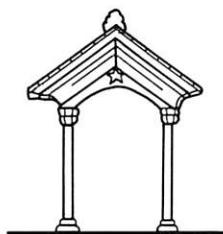


1990

市立函館博物館

研究紀要

第 1 号



1 9 9 0

創刊にあたって

市立函館博物館は、明治12年北海道開拓使函館支庁仮博物場として開館し、1世紀を超える歴史をもつ博物館であります。

以来、この地域における歴史と文化、自然科学にかかわる資料を収集し、博物館における教育、文化、研究活動が継続され、こんにちに至っております。

今、本館には、考古、美術資料を展示するとともに、自然科学資料も所蔵し、また五稜郭分館には、主に五稜郭築造および箱館戦争に関する資料を、収蔵・展示しております。

また、博物館をとりまく社会の変化に対応すべく、博物館の将来構想の検討にも着手しているところではありますが、その一環としてまず永年の懸案事項でありました、調査・研究に伴う研究紀要を発行し、今後の博物館活動に供することになりました。

申し上げるまでもなく、博物館の主要な役割であります調査・研究は、博物館資料や博物館活動の具体的な状態や事実の正確な把握、そしてそれに関する専門的な追求であり、担当学芸員の地道な努力の結果の一つが、この研究紀要であります。

常設展や特別展をとおして個々の資料が、生命を与えられたように輝いているのは、その個々の資料の持つ多くの情報を精査した結果であります。

この研究紀要は創刊号であり、未熟な点も多いことと思いますが、ご高覧・ご指導をたまわれれば幸いに存ずる次第であります。

平成2年10月1日

市立函館博物館長

木村 繁

目 次

創刊にあたって

西洋画・写真術の先覚者横山松三郎伝 1
と函館博物館所蔵品

横山松三郎年譜 39

写 真 図 版 43

五稜郭出土の肥前系陶磁器 49

写 真 図 版 56

西洋画・写真術の先覚者横山松三郎伝 と函館博物館所蔵品

千代 肇

はじめに

横山松三郎（1838～1884・天保9年～明治17年）。日本西洋画と写真史でにわかに注目を集めた人で、その人物と作品の研究が進められている。横山松三郎は函館の人で、幕末に外国人から洋画法と写真術を学び、東京に出てから研鑽を続けて偉業を為遂げた。これまで資料が少なく、一般にはあまり知られていないが、最近になって横山裕氏、高田嘉七氏所蔵資料が研究家の眼にとまり、改めて日本の洋画と写真の黎明期において先覚者であったことが確認された。

1985（昭和60）年、東京国立近代美術館主催の『写実の系譜 I 「洋画表現の導入」江戸中期から明治初期まで』の特別展に1枚の「横山松三郎 油彩自画像 明治17年頃」が出品された。それは横山松三郎が死に直面したときかと思わせる壮絶なものであった。1986（昭和61）年の6月、大阪の東野進氏から博物館に横山松三郎について問合せがあった。相当量の写真が発見されたとのことで、北海道新聞社の桑島洋一氏を紹介したところ、彼の調査で蜷川式胤旧蔵の横山松三郎撮影「荒廃した江戸城」などの写真であることがわかった。明治4年の江戸城の写真は、世に出されることなく蜷川少史が保存していたもので、横山と書かれた黒漆塗写真木箱など写真機や四ッ切写真と特殊サイズのガラス写真が600枚も発見されたのである。新聞や週刊誌の発表は研究者達を驚かせた。1989（平成元）年東京コニカプラザ企画『写真150年展「渡来から今日まで」』がコニカプラザで開催された。出品の「横山松三郎 自画像 写真油絵」と「横山松三郎 初代渡辺康平之像 写真油絵」（寄託品、市立函館博物館蔵）など横山松三郎の作品は、日本写真史で初めて公開された貴重なものであった。横山裕氏所蔵の「横山松三郎アルバム」、「手控帳」、「日記」などが研究者達によって調査される動機となった。1990（平成2）年2月、飯沢耕太郎・桑島洋一「未開の曠野を駆け抜けた孤高の写真師横山松三郎」『芸術新潮』で、「横山松三郎アルバム」や「手控帳」などの横山松三郎関係写真資料が掲載になった。これほどまでに近年になってから有名になった人は珍しい。今年になって開館した東京都写真美術館でも、特別展に「横山松三郎」が取り上げられて開催準備が進められている。

日本博物館史の上で、横山松三郎の作品は明治5年に初めて開催した文部省博物館の「元昌平阪（湯島）聖堂 博覧会」写真、翌6年日本参加のオーストリア・ウィーン博覧会出品資料写真などがある。

私が東京の高田家に横山松三郎関係資料があるのを知ったのは昭和53年4月であった。この年博物館の特別展「北前船と高田屋」を企画し、前年に高田嘉七氏のご好意で江戸時代の高田屋嘉兵衛関係資料を借用できる内諾を得ていたからである。函館には高い台座に高田屋嘉兵衛の銅像はあるが、その資料公開は初めてで、資料は江戸時代からのものと思われぬほど状態も良く、箱館全盛期の高田屋文書などがあった。そこに横山松三郎関係資料があった。高田家と横山家は江戸時代から関係があったばかりでなく、明治に横山松三郎が亡くなったとき、四代目高田篤太郎は松三郎の弟松蔵の親権者的間柄にあった。

特別展に多くの高田屋文書と「高田屋嘉兵衛肖像画写真 額装」、横山松三郎関係では「横山松三郎油彩自画像」、横山松三郎自筆の「不朽無變色重寶墨写真術方率」、「ガラス写真」では“腰刀に洋傘を差して洋式銃を手にした武士風の人物”などを借用することができた。特別展は5月1日から2ヵ月の長期間開催であったが、開催にあたって六代目高田義松氏は91才の御高齢でありながら東京からおいで下さり、展示資料のご説明をいただいた。このとき高田家と横山家のかかわりを詳しくお話を聞くことができた。そのご縁で昭和54年8月21日に横山裕御夫妻が函館に来られたとき、船見町高龍寺にある横山家先祖代々の墓、横山松三郎「温良院實參靈性居士」の墓などをご案内した。昭和58年10月に、横山松三郎百年忌法要を高龍寺でいとなみ、北海道写真史料保存会などの呼びかけで「横山松三郎を偲ぶ会」を開き、横山裕氏御家族と高田嘉七氏を囲んで、函館の横山松三郎が語られた。

“西洋画・写真術の先覚者横山松三郎と館藏品”を書くにあたって、横山松三郎年譜を調べたが、著者によって必ずしも内容が一致していない。幸いにも、この1月に東京都写真美術館準備室の方々が横山松三郎調査で函館博物館に来られた。このとき東京都映像文化施設設置企画委員松本徳彦氏から草稿の横山松三郎年表をいただいた。これを参考にして『横山松三郎傳記』（明治17年）を調べ、函館の歴史的背景のなかで考証する結果となったので、傳記である「横山先生履歴」を解説しながら論述した上で、市立函館博物館の藏品を紹介することにした。

1. 『横山松三郎傳記』と函館⁽¹⁾

『横山松三郎傳記』市立函館図書館蔵は、横山松三郎の伝記を知ることができる原本でもある。内容は「横山先生履歴」とあり、巻末に“明治十七年十月十八日門人亀井至一下国熊之輔等先生ノ遺記ニ據リ 嘗テ聞ク所ヲ併テ謹テ誌ス”とある。明治17年10月18日は、横山松三郎が亡くなった10月15日の3日後にあたる。石島屋原稿用紙の筆書き11枚である。同文のものは、他にもあるようで文中の“傳教師ニコライ氏”が“傳教師仁古雷氏”とある。

これまでに述べられてきた横山松三郎についての見解の違いの原因を調べると、この原本である「横山先生履歴」の解釈にあった。はっきりとした字であるが、辞典にない漢字、現在と意味の違う字が涉出し、句読点がないもので、年代の記載がなく文章内容が時代的に前後している。簡単に書かれているようであっても、記述内容の時代考証を必要とする部分もある。

横山松三郎傳記を述べるためには、「横山松三郎自筆の履歴」（明治13年）、「手控帳」などとの検討も必要であるが、ここでは「横山先生履歴」を中心に函館の歴史などを加え、写真史は松本徳彦年表を参考とした。なお記載順序は、年代順としたが、要約は別に年表を加えることにした。

「横山先生履歴」

『横山松三郎傳記』は副題「横山先生履歴」から文章がはじまる。“先生通稱松三郎晩（年）ニ文六ト改ム 北海道函館之人也 父ヲ文六トルス 蝦夷擇捉島ヲ管ス 祖父文（六）豪強ニシテ氣槩アリ 寛政年中高田屋嘉兵衛ニ従ヒ共ニ盡す支（事）アラントシ”とあるので、寛政11年の箱館、幕府直轄となって箱館奉行が置かれてから年代的に箱館の状況を述べながら考えていきたい。なお文中で「横山先生履歴」の引用文は“ ”として特に注記をしない。

1799（寛政11）年。松前藩の所領であった箱館からエトロフ（捉擇）の島までを幕府直轄とし、1802（享和2）年に箱館奉行が置かれた。高田屋嘉兵衛はエトロフに漁場17カ所を開き、幕府から場所請負人を命ぜられ、苗字帯刀を許される。嘉兵衛はさらに根室、日高幌泉漁場を開いて、箱館を根拠地とした。

“因テ幕府ノ嫌疑を蒙リ生国淡路ニ幽謫セラルニ及ヒ 志業遂ニ成ラズ鬱憂函館ニ歸リテ歿ス”前文から読むと高田屋嘉兵衛が隠居して嘉兵衛の弟金兵衛の時代のときが正しい。高田屋は、本店を兵庫から箱館に移し、兵庫、大坂、江戸に支店を設け、文化・文政時代の箱館が高田屋の街といわれるほど繁栄していた。松前藩復領となり高田屋金兵衛が松前

から苗字帯刀を許されたが、高田屋持船とロシア船が密貿易を行った疑いで3年間裁判で争議が続き、密貿易でなくロシア船と高田屋持船が旗合せを行ったかどで、1833（天保4）年に関所となり、高田屋漁場、船などの財産が没収になり、高田屋金兵衛は箱館追放、淡路の都志（五色町）以外は他出禁止となった。

松三郎の祖父初代文六は、高田屋嘉兵衛のときから高田屋金兵衛のときまで仕えて、天保4年の事件を憂い、天保7年12月に箱館で亡くなった。父二代目文六も高田屋金兵衛に仕えていたので箱館に帰った。

高田屋と文六の関係は、高田屋文書のエトロフなどに名がみえるので、エトロフ漁場でも責任ある立場にあったことがわかる。

高田屋関所のとき、金兵衛と養子縁組をしていた高田屋嘉兵衛の弟で金兵衛の兄である嘉蔵の実子嘉市が、源左衛門と名を改めて箱館内潤町で高田屋三代目の家督相続をした。高田屋屋敷といわれた内潤町の屋敷等のうち、親族や主従関係にあった横山文六の土地家屋などは財産没収をまぬがれていた。

“即チ初代横山也 父文六ニ及ンデ再ヒエトロフ島ヲ管ス 於是先生天保九年十月十日ヲ以テエトロフ島ニ生ル”松前藩は、東蝦夷地の捉擇などに蝦夷地警備のため、勤番所を設けていた。横山松三郎が生まれたとき、父文六がエトロフ島を管スとあるから、松前藩の捉擇場所請負人のもとで漁場の支配人的立場にあった人と思われる。

松三郎絵師を志す

1838（天保9）年。松三郎は、10月10日エトロフ島で生まれる。幼名松三郎、後に三代目文六を襲名する。この頃のエトロフ島は、蝦夷警備のため台場と勤番所が設けられていたが、漁場では春から秋に出稼ぎ人がきて、冬になると越冬の番人を留守居としていた。松三郎の親も冬は箱館に帰っていたと思われる。1848（嘉永元申）年5月17日、父文六が亡くなる。

“先生父歿シ母ト俱ニ居ル 兄弟数人皆齡十才ニ滿タス 先生母ノ勞ヲ思ヒ業ヲ定メテ其志ヲ慰メント欲ス”松三郎の家族は、母ミヤと姉2人、妹ミヨ、弟松蔵であったといわれる⁽²⁾。箱館に家があったと思われるが、幼い妹や弟を思うとき、松三郎は長男として仕事につかなければならないと思っていた。“時二年十五才母命テ曰ク汝宜シク商業ヲ学ブヘシト 乃チ商業某店に仕役ス”某店とは屋号≡（りゅうごに）⁽³⁾とも呉服店堺屋八右衛門⁽⁴⁾ともいわれている。“而シテ常ニ画図ヲ好ムノ癖アリ 夜間主家ノ事了シタル後 獨リ燈リヲ挑ケテ（灯心を搔立て） 北齊翁ノ画本ヲ臨寫ス 大抵曉ニ徹スト云フ 二年之後 肺疾ヲ得テ家居スルコト三年ニ至ル 時二年十八既ニシテ病愈ユ”“因テ自ラ商店

ヲ開キ大ニ行レリ”

1854（嘉永7・安政元）年。同年3月神奈川において日米和親条約が締結すると、箱館港は翌安政2年3月から開港されることになっていたが、ペリー提督は開港に先立って下田・箱館港の視察を申し入れた。準備のない松前藩は箱館市中に厳しい触書を告示し、婦女子や子供を大野村などに避難させたが、市中は恐怖と動揺のなかにあった。4月15日（新暦5月11日）ペリー艦隊が3隻入港し、次いでペリー提督のポーハタンとミシシッピー号の黒船が入港した⁽⁵⁾。

“米国船ノ来り市中騒然タリ 先生母ト共ニ市ヲ退ク 已ニシテ事平カナリ” 市中の恐怖と動揺は、わずか数日で平穏になり、避難した人達も箱館にもどった。米軍士官らは市中見物や買物をしたが、何よりも箱館人を驚かせたのは“黒人と箱の鏡”であった。

箱 の 鏡

当時の記録、箱館の名主小嶋又次郎⁽⁶⁾『亜墨利加一条写』⁽⁷⁾には、“上陸した3人は絵図面方”と見え、“絵図面をとるに鏡を立てて その鏡に絵図面 人物がそのまま写り その場で鏡を取り出し、写ったものが鏡から無くならないので、もしや、魔術ではないかと市中の噂になっている”と記述している。記録にはブラウンが撮影した人達の名前があり、Eブラウンの銀板写真「松前勘解由と従者」が松前町に保存されている。

これが箱館最初の写真記録と現物である。

箱館の写真記録は翌年（1855）、津軽弘前から箱館を訪れた平尾魯仙『箱館夷人談』⁽⁸⁾にも書かれている。再び幕府直轄となった箱館には箱館奉行が置かれ、箱館が下田港と開港になったので、米・英・仏・独国の船が出入港していた。夏には毎日のように3・40人から5・60人づつが上陸して物珍らしく路地まで入り、子供達は外国語の必要から外国語を帳（手控）に書くなどして当てっこしながら覚えていた。魯仙の記録には“画師是を模範として真像を画くといえり。…此鏡にうつるは人倫にかぎらず、山間江海の実景をうつすも又爾り。竝に測りがたきは、其写さんと欲するものの形而已止りて 四辺にある辟障樹木の類は去て形を停てとなし”と、写真機の大きさについては“是は筐（箱）中に内てよく物うつし物とぞ 其筐丈二尺許 巾一尺五、六寸にて 上下に一面づつの鏡を設け和に翫ぶノソ（ゾ）キと云物の製にして 是にうつすべき鏡をさし入るるものなり。此鏡の大さ一尺五、六寸に一尺一、二寸の物にて 先づ其うつすべき人を正面に居らせ 手足動する事を禁じ しばらくうつして是を引取に 其人のかけ鏡面に停り 面目はもとより衣服の織目まで微々鮮明にして言語に絶せり。又日を累るといえども消することなし。”と書かれている。

写真は、安政元年に続いて安政2年も箱館の人ばかりでなく、旅人さえも驚かせていた。写真が何であるかわからず“もしや魔術”かと、写真機を一種の“箱の鏡”と思っていた。横山松三郎もどれだけ驚き、じっと観察して状景を脳裡に焼きつけていたか知れない。この時18才であった。松三郎の“真像を画く”は、このときに始まる。

写真術と印刷術の目覚め

松三郎は病弱だった。店を開くが病気がちのため、それも続かず、たまたま親族の者が諸国巡りの旅に出るのを知って病気回復祈願の旅に出た。奥州津軽から江戸、京阪、四国讃岐神社を詣でて、木曾より日光、信州善光寺と歩いて箱館に帰った。20才のときである。箱館の街は、不況の上に不漁でどん底にあえいでいた。横山家は、貸金や家賃の催促もできず、ついに家産をなくした。

1858(安政5)年9月、初代駐日ロシア領事ゴシケビッチ、医師アルブレヒト、司祭フィラレットら15人が着任した⁽⁹⁾。箱館はロシアにとって極東の要地であり、武官などの滞在は箱館人にとって心穏かでなかった。翌安政6年6月、幕府は箱館、神奈川、長崎港を自由貿易港とした。6月箱館に入港した第一船は米国船モーレー号で、乗組員が上陸した。“先生又業ヲ得テ母ヲ安ンセンヲ思フ 而レドモ未タ得ス 會タマ米国ノ軍艦函館ニ来ル 米人ノ上陸シテ勝景地勢ヲ寫セルヲ見ル 先生此ノ術ニ達シ以テ永ク母ノ状兒(貌)ヲ遣サント欲ス 然レドモ由ナシ 幾クモナクシ”しかし、その機会にめぐりあうこともなかった。そのとき“魯国人、珎画奇器ヲ貯フルヲ聞ケリ 令弟松蔵累ホ魯語ニ通セリ 因テ魯人ニ交ルヲ得タリ 室内ノ珎画寫真及ヒ昆蟲ノ干製ヲ見ル 魯人小虫ノ寫生ヲ先生ニ託ス 一(カ)月ニシテ成ル 魯人大ニ喜ヒ 懇信(親)尤モ厚シ 因テ寫真ノ術ヲ問フ 魯人手ヲ以テ其ノ状景ヲ示スノミ”

横山松三郎が魯国人(ゴシケビッチ領事)から写真を初めて教えられた安政6年頃の記述である。文章は続いて“先生思察シテ累ホ其法ヲ得 時ニ元治元年冬也。”横山松三郎が密かに目指していた写真は単に物を写す技術ではなかった。“其法ヲ得”とはどんな技法か。

“向(先)ニ魯ノ軍艦函館ニ来ル時 画工レーマンナル者上陸シテ風景勝地ヲ寫セリ、然ルニ多クハ山間ニ踏ミ入り原野ニ宿ス 傭フテ器具ヲ荷ハシムル者多クハ其勞ニ堪ル能ハス 因テ之ヲ傳教師ニコライ氏ニ謀ル”と文章が続く。このときすでに宣教師ニコライを松三郎が知っていたのである。「横山先生履歴」は、松三郎と宣教師ニコライについて何も述べていないが、ニコライ氏によって松三郎は、非常に大きな感動を与えられていたことがある。

ニコライは、1861（文久元）年6月14日ロシア領事館付司祭として箱館に着任した。ディアナ号艦長ゴローニン提督が1812（文化9）年に、沿岸測量のためクナシリ島に上陸して、守備隊の南部藩兵に捕えられ、部下6人と箱館に護送されて囚人の身となり、箱館・松前と釈放までの2年3ヵ月を過ごし、高田屋嘉兵衛の盡力で帰国できた。ゴローニンは鎖国日本の実情をアルキサンダー1世に報告した。ニコライは、この報告とリコルド副艦の救出記である『日本俘虜実記』を読んで、日本に行くことを強く希望していた。この本には、ゴローニン釈放に盡力した箱館の豪商高田屋嘉兵衛の国情を超えた厚い友情と感謝が述べられていて、1816年に勅許でモスクワで出版されると、英、仏、独、蘭語訳が各国で出版になった。その中扉には“高田屋嘉兵衛の肖像画写真と嘉兵衛を讃える文章”の印刷が掲載されていた。ニコライは箱館で嘉兵衛の子孫に会えることを期待していたのである。

ニコライ司祭は箱館着任のとき、高田屋嘉兵衛を紹介した中扉の複写写真を持参した。これは縦長の大きさ10cmほどであるが、厚い角丸仕上げの台紙に貼られたものであった。肖像画は凛々しく胸に大きな勲章を付けていて、外縁は円形浮出である。円形浮出の写真下縁に、それを囲んでロシア語“参照ディアナ号副将リコルド著34頁（大正6年11月4日高田義松氏譯）”があり、ТАКАТАЙ-КАХИ. の下に高田屋嘉兵衛の功績が讃えられていた。

この出版された本の複写写真が、高田屋嘉兵衛の子孫である四代目高田篤太郎に渡された。このとき横山松三郎の妹ミヨが篤太郎に嫁いでいたが、西洋画に見る高田屋嘉兵衛の肖像、嘉兵衛を讃えた活字印刷の写真は高田家親族を感激させた。ニコライは着任のとき1857（安政4）年にゴシケビッチと橘耕齋による露和辞典『和魯通言比考』を読んで日本語を勉強していたので、片言ながら高田家親族とも話ができた。このとき横山松三郎はニコライを知ったのである。

松三郎は、ニコライ持参の写真が高田家の家宝といえるものであり、自ら額装を製作した⁽¹⁰⁾。額は木製黒漆塗仕上げで、二重の額装、内額縁を金で花蔓文を上下、左右にあしらっている。当時は写真額など無く、絵は軸装か扁額であった。額装の図案は、箱館で高価な陶磁器が移入されていたので、嘉永年間（1848～1854）の九谷焼、赤絵金欄手から模したと思われるもので、その豪華さはなくむしろ黒漆塗りの地塗りに手描き金花蔓文の内額が一層高田屋嘉兵衛肖像画写真に貴品をただよわせている。

高田屋嘉兵衛肖像画写真額装は、横山松三郎作品として最も古く、1861（文久元）年のものである。松三郎が手にして写真ほど自分の将来をかけ、母を安心させるものはないと心に誓ったと思う。彼が生涯求め続けていた“真像を写す”に洋画法と写真術、それは銀

板写真でなく、肖像画と接写による写真印刷術であった。彼が普通の写真師でなかったことは、生涯を通じてあくことのない写真技法の習得と写真術の研究を続けていたことである。外国の優れた高田屋嘉兵衛の肖像写真は印刷術、偉人であった高田屋嘉兵衛をそこにみた感動が心にあったのではないだろうか。

洋画法と写真の試作

松三郎が魯国人に写真を教えてもらいに行くが、松三郎が知ろうしたことは教えてもらえなかった。松三郎が1ヵ月もかかって“小虫の寫生”を描きあげた。絵の好きな彼が写真を知るための1ヵ月は真剣で、この写生は、昆虫である甲虫、幼虫脱皮の蝶などで、学術研究観察の基礎となっている觸角、体毛など細かな実物写生が要求され、本物同様の着色もあったと思われる。

“傳教師ニコライ氏ニ謀ル…氏其言ヲ以テレーマンニ告ク…於是先生連日レーマン山壑幽谷ノ間ニ随フ レーマン寫ニ臨ミ 只真景ヲ點視スルノミ 其手筆ヲ見ルナシ 胃憶ヲ以テ寫スカ如シ 奇ト云フヘシ 先生其ノ傍ヲ離レズ注意之熟觀シ 逆ニ傳彩調和ノ法ヲ暗知スルヲ得”。洋画の風景画を真のあたりに見て“傳彩調和ノ法ヲ暗知スル”。これは油彩の絵具を調和して色調を出すことと思う。レーマンについて器具を背負って昼夜山谷に過してから、松三郎はレーマンに絵が好きかと尋ねられて、松三郎は蝶々の画を描いて渡すとレーマンはその画を持参して帰国した。松三郎が洋画を初めて覚えたときで、1861（文久元）年であった⁽¹¹⁾。

“斯ノ如ニモノ殆ント三年 私カニ真画ノ葢奥ヲ淑スルヲ得タリ” “因テ此技藝を皇国ニ起サンヲ思フ 然レドモ覆載之間品物ノ未然タル箇々筆端ニ尽ス能ハス” 洋画具、絵筆、絵具、カンバスなど品物は手に入れることができなかった。“故ニ向キニ聴ク所ノ撮影ノ法ヲ以テ 先ツ実景ヲ速寫シ 然ル後 徐カニ正寫調制スヘシト 於是乎志ヲ撮影ノ術ニ轉セリ”。洋画を志したが撮影の術にかえたとある。“先きに聴き知った所の撮影の方法”は、1861（文久元）年にレーマンが箱館に来る前のときのことである。その時の様子が書かれている。

“当是時海内未タ開ケス 藥品器械舶来スルモノ甚タ希ナリ 此ニ於テ身自ラ薬料ヲ調和シ器械ヲ製作シ屢々顛沛ヲ取り 時々失錯ヲ来ス 千思万慮而譟千挫シテ 僅カニ其ノ形状ヲ寫スヲ得タリ”。この時、海内未だ開けずとは、1859（安政6）年の幕府が箱館港を自由貿易港とする前である。1858（安政5）年にロシア領事達が着任した当時は、箱館奉行の許可がなくては、ロシア人と接触することすらできなかった。“自ラ薬料ヲ調和シ”とあるが、安政3年に諸術調所があり、松三郎は武田斐三郎から薬品の調合を学んでいた

のではないかと思われる。

“僅カニ其ノ形状ヲ寫スヲ得タリ。嗣子啓次郎氏⁽¹²⁾云フ 始メ寫真鏡、函ルヘキ箱ナシ因テ蜜柑箱ヲ用イ穴ヲ搾チ 之レニ換ヘ 又寫真鏡ノ玉ノ如キハ先生自ラ磨キテ作ル今尚ホ存スト 其勤苦實ニ想フヘキモノ有リ”。蜜柑箱に穴を開けて、手造りレンズで写真鏡を作っている。写真鏡の試作は、初めて写真の実験に成功していたのである。年代についてここで整理してみると、レーマンが来る1861（文久元）年前で、1859（安政6）年の箱館自由貿易港となる前“当是時海内未タ開ケス”である。その前年にロシア初代領事ゴシケビッチ一行が着任するが、箱館奉行の特別の許可がないと仮住居の実行寺には入れず安政3年から5年までの間の年代といえる。

安政6年から文久2年の箱館

1859（安政6）年、箱館と長崎、神奈川（横浜）の3港が自由貿易港となる。6月2日（陽暦7月1日）第一船、米国帆船モーレー号が入港した。この日、外国関係税関の運上所が設けられた。この6月には、ロシア帝国コルベツト艦リング号が箱館に入港して、奉行の部下が艦上で写真の操作を体験した⁽¹³⁾。この年の外国船入港と輸出入品目⁽¹⁴⁾を旧6月から12月までをみると、軍艦、商船、鯨漁船は、魯西亜20隻、亜米利加14隻、英吉利14隻で、麦粉、パン、青画具（ペンキ）、硝子板、薬種（品）、ブリキ瓦、時計、クサリ、巻煙草が輸入されていた。翌年にはコーヒー、マカロニなども輸入されている。10月5日になると英国領事ホジソン夫妻が着任して、海軍々楽隊によるアニーロニーなどが演奏され人々を驚かせた。

ロシア領事ゴシケビッチは、13カ国語に通じる東洋学者で、写真術のほか、爬虫類、昆虫研究家でもあった。1857（安政4）年に中国（清）産昆虫、特に蝶のコレクションをロシア帝国科学アカデミイ動物博物館に寄贈している⁽¹⁵⁾が、1861（文久元）年にはマキシモビッチの標本と昆虫・魚類標本を本国に送っている⁽¹⁶⁾。昆虫は、ロシア昆虫学者モチユルスキーに送り、箱館滞在のとき新種に夫人エリザベータの名をつけたエリザハンミョウがある⁽¹⁷⁾。ロシアの世界的植物学者マキシモビッチは、1860（万延元）年9月から翌1861年10月まで箱館に滞在して、助手に須川長之助を雇い、植物を採集したが、山間の森林を伐採して樹木の標本を収集して鳥類標本など多量の荷物を本国に送っている。画家レーマンと横山松三郎が深山の山間に入って画を描いているので、マキシモビッチの植物、森林標本採集、駒ヶ岳などの小沼、上磯の茂辺地の山などと関係あるかと彼の「箱館日記」⁽¹⁸⁾をみたが、レーマンの名はなかった。

1861（文久元）年、箱館奉行は海外貿易の試みとして、箱館で建造の洋式船亀田丸でロ

シアのニコライエフスクに航海する。6月に司祭ニコライが着任。8月幕府は箱館入港の米国ブリック型軍艦アルティア号を購入して健順丸と命名した。

1862(文久2)年、箱館奉行は奉行所付属船健順丸を清国香港、蘭領バタヴィアに派遣して貿易を試みようとして、5月に海産物を積んで出帆し、品川に入港した。

横山松三郎の箱館に関する諸説

「安政元年8月露西亜使節プチャーチンがチャーナ号に乗じて函館に入港せる際、乗組員にレーマンといえる画家あり、本道の風物を写さんと欲して案内人を雇入れんとしたが応ずる者が無かった。松三郎進んで之に応じ洋画法を習得して之を折衷して別に新機軸を出した。…元治元年2月武田斐三郎が健順丸に乗じて上海に行くことになったが松三郎は之に随行を命ぜられた。廿四才の時である。…上海に於て彼は亦洋画を修めたが、ここに於て初めて写真術を習った。撮影術はほぼ判ったが之を紙写する方法や石版術は横浜へ帰ってから下岡蓮杖から傳えられその奥儀に達した。」(越崎 1936)

「松三郎は文久元年ロシア人の画報通信社員レーマンの助手になることをニコライにすすめられ、このとき日本画にない写実的表現法を洋画のなかに見い出した。…松三郎は、函館から幕艦健順丸に乗り、写真術習得のため上海に行き、元治元年8月ごろ帰函している。上海では師にめぐり逢わなかったが、銀板写真や立体写真鏡などを買い求めた。帰国後、ゴスケビッチが写真術にくわしいことを知り、弟松蔵を介してゴスケビッチから写真術を習った。…松三郎はすでに外国で開発されていた印画法の技術を会得するため、横浜で開業していた写真師下岡蓮杖の弟子となり、ここで紙写真法を学んだ。」(桑島1979)

年代を明らかにしていないが、渋谷氏は前文に明治13年の横山松三郎自筆の履歴を引用し、松三郎の写真機縁を次ぎのように記している。「“今見るに筆とらず其真景を写す事神速なり。何卒して此術をもって母の真貌を写し後世に残し永く孝行をもいたしたき思ひしより、しきりに起心し居内魯国のコンシュールゴスケベツと申す異人此術を知り機械を所持し楽しみに肖像写す。此時愚弟十四才なり。住吉屋庄兵衛と申商人あり、此店に愚弟松蔵を見習に遣わしおけり。其店に魯人買物に來れり。愚弟をしてよく語をおしへよく買物を扱ひさせりといふ。…愚弟に尋ねて写真の事を聞く。…段々心安しくなり写真事を相尋ね申といへども其語よく不分” …文久3年(1863)、箱館奉行所属の健順丸に横山は乗船することができ、上海で彼が望んでいた、より程度の高い写真知識を得ることなく帰国した。帰国してから横浜で写真館を開いている下岡蓮杖のもとで修業を許されたことは大きな幸運であった。」(渋谷 1983) この渋谷氏の年表には、万延元(1860)年頃、木津幸吉、田本研造、横山松三郎がゴスケヴィチ、ゼレンスキーから写真術を学び、文久元年に横山

松三郎が画家レーマンから洋画法を学ぶ。元治元年松三郎は健順丸に乗って上海に赴き、帰国して横浜の下岡蓮杖に入門。となっている。

「1861（文久元）年に画工レーマンから洋画を学ぶ。1862（文久2）年箱館奉行、健順丸を香港・バタビア方面へ派遣。松三郎同乗して上海へ。1863（文久3）年2月、上海に到着。箱館に帰りゴシケヴィチから写真を学ぶ。（元治元年2月21日上海着ともいう）1864（文久4・元治元）年ゴシケヴィチ、松三郎に小虫を描くことを依頼。湿板写真術を教える。1865（慶応元）年、松三郎横浜下岡蓮杖の門下生となる。写真・石版術を習得1866（慶応2）年、（松三郎）印画法を函館の仲間、木津幸吉、田本研造に伝える。」

〈松本 1990. 1月〉

「1861年頃に箱館に来たレーマンと呼ばれる「画工」の仕事を手伝うようになる。…写真を学ぶことを決意した松三郎は、ちょうど折よく幕船健順丸がバタビア方面に向かうことを知り、1862（文久2）年に同船に乗りこんで出航する。健順丸は途中で寄港地を上海に変え、翌1863（文久3）年2月に到着、松三郎は写真術のことを尋ねまわすが、うまくいかなかった。同年中に箱館に帰った彼は、ロシア領事ゴシケビッチが写真をよく写すことを知る。…ゴシケヴィチから得た写真の知識をさらに深めるため、松三郎は1865年（慶応一）、既に横浜に写真館を開業していた下岡蓮杖の門下生となる。」〈飯沢 1990〉

これらの諸説は、問題となる“元治元年冬也”と健順丸の箱館出港から帰国の解釈によって違った説になったと考える。

健順丸箱館出港と元治元年冬也

“先生思察シテ畧ホ其法ヲ得 時ニ元治元年冬也”は、魯国人から手をもって其の状景を示すのみ、に続いているが、“先生思察シテ”とあるから、魯国人から写真の術の手解きを受けたのが元治元年冬とはならない。横山松三郎自筆履歴にある“魯国のコンシュールゴスケベツと申す異人此術を知り、機械を所持し楽しみに肖像写す。此時愚弟十四才なり”を1864（元治元）年とすると、父文六が亡くなったときの1848（嘉永元）年には弟松蔵が生まれていないし、亡後3年後に生まれたことになる。

松三郎が魯国人、ゴシケビッチ領事から写真術の手解きを受けたのは、ロシア領事館と箱館の状況、弟松蔵の年齢から考えると1859（安政6）年か1860（万延元）年となる。

健順丸の箱館出港と横山松三郎であるが、『函館市史 通説編第一巻』1980年は、“元治元年2月9日に健順丸が箱館港を出港して上海に至る”とある。これは、1862（文久2）年箱館奉行が海外貿易の試みとして清国の香港と蘭領バタビアに健順丸を派遣する目的で海産物を積込んで5月に箱館港を出港したが品川港に入港したとき物議が起り中止となっ

た。『新北海道史 第二巻通説一』1970年では、“翌3年10月になって長崎および上海派遣の命を受け、11月11日品川を出発して兵庫に至り、翌元治元年2月9日兵庫を出港したが、風波のために長崎に寄港することができず、2月28日上海に到着し滞在約1ヵ月半…4月9日上海を發し、途中長崎および兵庫に寄港し、7月10日無事品川に帰着した。”とある。『函館海運史』⁽¹⁹⁾1958年は、『新北海道史』と同じ内容で、上海到着日が21日となっているが、諸説を列記してから『函館海運史』をもとに考えていきたい。

1862（文久2）年松三郎が健順丸に乗船して上海へ。1863（文久3）年2月上海に到着（元治元年2月21日上海着ともいう）。箱館に帰りゴシュケヴィチに学ぶ。（松本1990）

1862（文久2）年末に松三郎は健順丸に乗船、1863（文久3）年2月に上海到着、同年中箱館に帰りゴシケビッチから写真を学ぶ、元治元年冬也。（飯沢1990）

1863（文久3）年横山は健順丸に乗船して上海から帰り、横浜の下岡連杖に修業する。同書年表では、1864（元治元）年健順丸で上海に赴きとなっている。（渋谷1983）

松三郎の箱館出港をはっきりさせていないが、函館から健順丸に乗り上海に行き、元治元年8月ごろ帰函してゴスケビッチに学ぶ。（桑島1979）

元治元年2月松三郎は健順丸に乗り上海に行き、洋画を修め、初めて写真術を習った。紙写する方法や石版術は横浜へ帰り、下岡連杖から傳えられ奥儀に達した。（越崎1936）

“時ニ幕府船艦健順丸ノ香港バタビアニ航スルニ遭フ 商法扱掛西田耕平氏ニ會セリ因テ告ルニ彼ノ地ニ航シ寫真術研究スルノ志ヲ以テス”西田は、君は横山家の相続人だから母堂もこれを許さんと乗船を断った。“先生之ヲ母ニ請フ 母曰ク汝既ニ其志アリ 而シテ官航海ヲ許サバ無上ノ事ト云フベシ 機失フベカラズト”自分にこの上ない理解の母に“先生九拜跳躍”して“支配掛蛭子砥平氏ニ請ヒ商法取扱手附ト為リテ香港ニ航スルヲ得タリ 時二年二十四”横山松三郎が24才というときである。1862（文久2）年（1862）のときである。

すでに写真術を知り、母もまた息子の松三郎が将来に命をかけた情熱を知って“汝既ニ其志アリ”そして“機ヲ失フベカラズ”と励ましている。母として病弱な身体で外国に船旅するという気持もあったであろうが、男児の決心をそこに見ていた。幕船、箱館奉行の健順丸乗船の松三郎は単なる客人でなく、商法取扱手附として身分が保証され、箱館で採用から帰港するまで給金も支払われていたことになる。途中、香港・バタビア行きが中止になっているが、『函館海運史』から健順丸の航跡をみると、1862（文久2）年5月箱館出港して品川に入港。物議が起り、香港・バタビア行きが中止。1863（文久3）年10月に長崎上海派遣を命ぜられる。11月11日品川出港して兵庫に至る。1864（元治元）年2月9日兵庫出港。2月21日上海到着。4月9日上海出港、長崎・兵庫に寄港して7月10日品川

に帰着。

横山松三郎が箱館出港してから帰国までに箱館に来れた期間は、品川で物議が起り、中止となってから、上海行命令の1863（文久3）年10月までの約1年3ヵ月である。この期間は詳らかでないが、文久元年にレーマンから洋画を習得して“斯ノ如キモノ殆ント三年私カニ真画の蒞奥を淑スルヲ得タリ”となるは文久3年にあたる。写真術研究の志が中止になったとき本来絵の好きな松三郎は、洋画の研究に熱中していたとも考えられる。文久3年『横浜奇談』が板行していた。“写真鏡という一種の奇物あり。これは人は勿論、地形遠景などまで其鏡に移せば、其のものの形色合まで少しも違はず、微細にギヤマン鏡へ留りて、更に消る事なき奇妙の工夫なり。されば人を寫す時は、その容體もの云ぬばかりなり。…今にては當地辨天通五丁目に居住する櫻田（下岡）蓮杖というもの、其傳を覚え業ひにいたしぬるが、異人の仕方と少しも違はず。”と書かれている。松三郎は、そのことを耳にしていたのであろう。

上海から横浜の下岡蓮杖

1863（文久3）年10月、幕府から健順丸の長崎、上海派遣命令が出された。このときの健順丸は、箱館に帰港して再び海産物などを積荷して品川から兵庫に向かい、1864（元治元）年2月9日兵庫を出港して、2月21日に上海に着いた。健順丸に軍艦奉行支配組頭格の箱館奉行支配調役並山口錫次郎、箱館奉行支配の幕吏、箱館の西洋文化・技術・化学などを勉強していた諸術調所の学生、箱館商人で商法取扱掛蛭子砥平、西田屋文兵衛など50人余りがいた。海外貿易の試みとしての海産物はすべて売却し、砂糖、唐物、水銀などを積載したが、上海の実情視察もあって1ヵ月半も滞在した。

上海は、1842年に英・清の南京条約で開港し、1844年は米国・仏国とも条約を結んで開港したが、1860年には英仏と清国のアロー戦争で11港を開港して自由貿易港となっていた。中国の上海は英、仏、米国の文物移入が自由貿易によって一層活発になり、外国人も居留していた。

西欧でのカメラは、フランスで1839年にジルー・ダゲレオタイプ・カメラが発売され、バロン・ピエール・アルマン・セギエが蛇腹付きカメラを公表していた。イギリスでは1838年にチャールズ・ウィートストーン教授がステレオ・スコープを発表し、1851年にスコット・アーチャーによってウエット・コロジオン・プロセス（湿板法）が開発されていた。ステレオ・スコープの古いビューワーは、透過光で透明陽画（ガラス乾板の透明陽画）をみるものであった。同時に反射光でプリントがみられるようになり、1851年のロンドン大博覧会以後、イギリス、ヨーロッパでステレオ写真が大流行して家庭でもみられるよう

になった。

横山松三郎は、箱館で体験したように、上海での外国人による写真撮影の情景、外国人専用の商店を見て、箱館で得られなかった写真やプロマイド、書籍類などをみて、蛇腹付きカメラ、レンズ鏡筒、双眼レンズ、接写用レンズ一式などを手に入れていたのではないかと思われる。ダゲレオタイプによるスライディングボックスなどの木製品は、当時洋式船技術の発達した箱館で真鍮などと製作が可能であり、最小限のカメラレンズを手に入れる必要があった。九州の上野彦馬、横浜の下岡蓮杖と違って後に東京で才能を発揮したのは、上海での体験であったと思うし、このとき西洋画も実物を見て見聞を広げたが、諸術調所の学生からある程度の英語や仏語の解説を聞くことができて、写真術の方法までは知ることができなかつたのであろう。

西洋画、高田屋嘉兵衛肖像画写真でみたようなプロマイド写真、立体写真とビューワなど、まだ日本に知られていない様々なものに接して、日本での写真の世界に夢を広げた。

健順丸は、4月9日に上海を出港して長崎に寄港し、諸術調所の学生などと長崎伝習所や商館、長崎奉行所、箱館海産物を入荷した長崎会所を視察、幕吏が所用を終えて、兵庫を經由して7月10日に品川に着いた。松三郎は帰途横濱に着いたとある。箱館商人蛸子砥平、西田屋文兵衛（西田耕平）は、箱館開港で自由貿易港となった長崎を視察したので、品川に向う途中、神奈川（横浜）にも寄つたと考えられ、横山松三郎は下船した。

“先生己ニ畧ホ撮影ノ術ニ通スト雖ドモ 未ダ紙寫ノ法方ヲ得ズ 香港ヨリ帰ルニ及ヒ横濱ニ到ル 下岡蓮杖ナル人アリ 撮影ノ術ヲ教ユ” 下岡蓮杖からの紙寫しの方法、石版のことが述べられたあとに、松三郎の健順丸の思い出として弟子に語つたことが述べられている。“先生ノ香港ヨリ帰ルヤ猛風ニ遭ヒ…必死ヲ決シ帶ヲ以テ体軀ヲ柱ニ縛ス 己ニシテ艦横濱ニ着ス” とあるので、箱館に帰らず横濱に着いて下岡蓮杖から撮影の術、紙寫しの方法の教えを受けていたことがうなずける。

“先生業ノ受ルコトヲ請フ 氏辞スルニ事繁ナルヲ以テス 先生行厨ヲ持シ氏ノ許ニ至ルコト数日 氏遂ニ其志ニ感シ其技ヲ傳フ 此ニ於テ先生始メテ紙取ノ法に達セリ” 松三郎は弁当を持って下岡宅を連日訪問して教えを願つたので、ついに下岡蓮杖も熱意を感じて、印画法を傳授した。

下岡蓮杖の最初の弟子となった横山松三郎は、すでに初歩的な知識を身につけていたしベリ一箱館来航と写真鏡のこと、上海での写真技術に関することなどを話し、蓮杖もまた下田開港と写真のこと、横浜に出て米国商館ショーヤ氏の手伝いをして、ようやく米人宣教師ウンシンから自分が描いた幾枚もの絵と写真機一式を交換して手に入れ、苦心して写

写真術を習得して写真館全楽堂を開業した⁽²⁰⁾ことも語り合ったことだろう。師弟関係というより、お互いに知り得た写真術の交換⁽²¹⁾での友情でかたく結ばれた。あまり時間をかけずに印画法を覚えて箱館に帰ってきた松三郎は、自分が志した写真術にまだ達していなかった。彼が望んでいたのは、下岡の紙写の法とは違う印画法であったし、写真印刷術であった。

“先生思察シテ畧ホ其法ヲ得 時二元治元年冬也”である。

横山松三郎の写真館通天樓

松三郎は、石版の術を下岡蓮杖から学ぶが、紙写の方法である印画法は、自分が追求していた墨写真術にはいたっていなかった。“そこで私は早速一番弟子の横山松三郎を手紙で呼び寄せて十日間教え、松三郎に是れから東京へ出て人に無銭で教えろ、写真も無銭で教えろ。金銭を取ると拵まらない。”〈松本1990〉下岡蓮杖『写真術伝来物語』、この年を1865（慶応元）年と松本氏は考えている。下岡蓮杖は石版術を知って松三郎を呼び出した。

“蓮杖氏又石版ノ方ヲ知ル 因テ亦之ヲ研究シ其ノ精ニ通スルヲ得タリ 先生石版ノ術ヲ究ムルヤ一室ヲ閉鎖シ 人ノ入ルヲ許サズ 日夜精思熟察 彼ノ石版ノ砂目調制ヨリ描寫印刷ニ至ルマデ昼ク之ヲ研究セリ 而シテ石版ニ用ユル所ノ墨料等ノ如キ 皆自ラ之ヲ調合造制セリ”松三郎は蓮杖から石版を教えられると箱館に帰って写真印刷術が可能なまでに研鑽を重ねた。1866（慶応2）年に松三郎は箱館で写真に取組んでいた木津幸吉と田本研造に印画法を教え、木津幸吉と田本研造は翌慶応3年に松前の福山城を写した。

1867（慶応3）年、横山松三郎は、江戸に写真場を開く準備に追われていた。ダケレオタイプのスライディングボックス、レンズボード、取枠、乾板ホルダー、それにステレオ写真機と接写装置の研究と製作であった。営業のためには最小限度写真機と写真現像の薬品が必要であった。

横山松三郎のガラス原板に写真機類を撮影したものが2枚ある。いずれも自分の写場で撮している。縦長写真で写場の床板の継ぎ部分がしなって、隙間が生じ、バックの左壁面下部に雨もりの染み汚れがあって、花格子文様の敷物に写真機を置いた写真Aと横長写真で台に格子縞布を覆せて敷物と格子縞布の上に写真機を置いた写真Bがある。Aは蛇腹付写真機でレンズ筒の無い物、新しいレンズボードに取付けた写真機、双眼レンズ3個、接写用レンズケース、手製スライディング・ボックスを並べて、ガラス板と思われる物を取付けた接写装置器とその下に新しいスライディング・ボックスを並べている。普通のレンズ鏡筒5個。Bは蛇腹付写真機、接写装置、接写用レンズケース、双眼レンズ付写真機1台、

写真機2台他にレンズボード、乾板ホルダー、取枠、箱枠がある。AとBで共通しているのは蛇腹付写真機、双眼カメラ、写真機、接写用レンズケースと手製接写装置である。これらにみる手製レンズボードとスライディングボックスは新しく、双眼カメラもレンズボードなどが新しくみえる。

幕末から明治の箱館は、洋式船建造もあって、キャビンなど木製技術や真鍮製品などが極だって優れ、洋家具も今日ではみられないが江戸気質の職人がいた。こうしたことから木製部分など箱館で製造したことも考えられる。

函館博物館蔵品の「新造双眼目鏡一式」は箱館で考案したものと思われる。

1868（慶応4・明治元）年、横山松三郎31才、江戸両国元坊に写真場を開く。5月に上野池之端仲町7番地に移転して写真館“通天樓”を開業した。近代的写場は、明取り屋根天井ガラス張りで、母屋の樓上からは不忍池が見渡せられた⁽²²⁾。“慶応四年撮影ノ業ヲ江戸両国元坊ニ開ク 次テ下谷池之端ニ移轉セリ”“先生東京ニ在幕府殘徒北方ニ脱スルヲ聞キ 老親ノ旧里ニ在ルヲ憂ヒ 率然家ヲ出ツ 途ニ衛兵ノ為ニ因ラル 己ニシテ旧知某ノ衛中ニ長タル有り 因テ郷里ニ達スルヲ得タリ”、通天樓には門人宮下欽、松崎晋二、片岡久米、大山武助、鈴木真一がいて、内田九一、北庭筑波、中島精一（侍乳）、二見朝隈、江木支店の成田常吉らと浅沼藤吉、中田清次らが出入りしていたといわれている⁽²³⁾。

明治元年10月20日、幕府脱走軍榎本武揚の艦隊は、フランスのブルーネ大尉らと蝦夷島森村に上陸して箱館戦争が起る。松三郎は箱館の状況を察して急に母親が心配になり、風呂屋に行くような姿のまま通天樓を出でいったので、いなくなってから門人達をあわてさせた。このとき箱館神明町に母と弟松蔵、松谷久吉に嫁いだ姉ソノ、高田篤太郎に嫁いだ妹ミヨがいた。戦争の激しさは、翌2年5月11日からの箱館奪回作戦である市街戦で、高田屋の蔵番も鍵を持ったまま大釜の中で身を隠し⁽²⁴⁾、高田屋の日記も数日間の空欄を後に数行が加えられているほどであった。

松三郎の箱館滞在中、箱館で写真を撮し、箱館戦争後の写真を弟松蔵と田本研造、それにロシア人が撮っていたといわれている⁽²⁵⁾。この頃の弟松蔵の作品は明らかではないが、松蔵は兄松三郎が箱館で写真術を研究していたとき、兄から写真術を学び、東京で兄の助手をしたり、函館で写真を撮影していた⁽²⁶⁾。

箱館戦争が終って、蝦夷島が北海道、箱館が函館と改められる。松三郎は函館から東京に帰る途中、弘前の医師佐々木元俊のところに寄って、箱館港の写真を公開している。（森林助『兼松石居先生伝』⁽²⁷⁾）東京に戻った松三郎は、助手や人夫など10人で日光全山を撮影した。“明治二年野州日光山ニ登リ庚申山ヲ撮セリ 次テ廟宇及ヒ濕布絶岳奇

峯ヲ寫シ マタ遺漏ナシト云フ”この日光全山撮影は、日本で最初の写真探検隊といえるものであった。“氏の奇勝を撮影せんと欲するや、一條の綱に六尺の軀を支へて千丈の谿に下り或は蘂蘿に傳うて百尺の崖に攀づる”と明治44年の『写真新法』5月号、栗園「本邦写真家列傳 横山松三郎氏」に書かれている⁽²⁸⁾。

明治2年は、函館で写真場を開業していた木津幸吉が、箱館府知事をつとめ箱館戦争後蝦夷開拓次官として公務始末をして東京に帰る清水谷公考（侍従）について上京したが、このとき田本研造（音無榕山）に写真機械一式を譲った。田本は、函館会所町（末広町）に写真館を開いて、弟子達と共に北海道で写真を広めた。

横山松三郎の名声

1870（明治3）年、横山松三郎の名は、長崎上野彦馬の門弟で幕軍調練の写真撮って徳川慶喜や幕吏と軍艦に同乗して東京に移り、浅草代地に写真館を開いていた内田九一と共に『東京諸先生高名方独案内』明治3年版に名をつらねるほど有名になっていた。松三郎の写真は、技術的に優れていただけでなく、レーマンや上海で影響を受けた19世紀の西欧文化、写實的西洋画や普及の段階にあった写真と写真技術の広い識見を持っていた。

“又命ヲ奉テ内田九一ト共ニ江戸城ヲ寫セリ 次テ西京奈良宝器ヲ撮レリ 西京御所亦此ノ時ニ寫セリト云フ”

松三郎は、1871（明治4）年太政官蜷川少史（式胤）の命を受けて江戸城の写真撮影をした。江戸城は1868年官軍の攻撃に対して徳川慶喜の恭順によって、勝安芳と西郷隆盛の会見などで無血開城したが、江戸城の写真撮影はこれが最初であった。蜷川も西欧の写真術を知っていたので特に横山松三郎の写真術を高く評価していた。江戸城は荒廃していたが、整備が始められたときで、その写真は東京国立博物館蔵『旧江戸城写真帖』や霞会館に保存されている。洋画家高橋由一が彩色したものもあるが、荒廃したその他の写真は公表されることなく蜷川が秘蔵していた。

この年5月23日、国の宝物保護のため「太政官 古器旧物保存について布告」が出された⁽²⁹⁾。この御布告に「古器旧物類別紙品目」がある。正倉院が開封したのもこのときで、“古器旧物保存調査”が実施された。明治5年の「壬申検査」である。蜷川式胤は文部省博物館御用を兼ねていた。この壬申検査は蜷川式胤らの組織的なもので、御布告に基づいて蜷川式胤しか入ることができなかった所にも写真師横山松三郎を同行して撮影をした。

蜷川は、国の博物館設立に積極的であっただけでなく、1873年オーストリア・ウイーン万国博覧会参加にも関係し、壬申検査には古都風景を描かせるために油画家高橋由一を連れ、その画材、絵具など一切を支給した。

壬申検査は、町田久成などにより5月27日から4ヵ月間、愛知、度会（伊勢）、京都、奈良、滋賀、和歌山、大阪、兵庫を調査した。横山松三郎は、伊勢神宮、京都御所、東大寺、大仏殿、三月堂、八幡宮などの建物と宝物を撮影し、このとき開封の正倉院と御物を撮影している。他の人に見られない松三郎の業績といえる。『壬申検査社寺宝物図集』などは一般に公開されなかった。壬申検査写真、ステレオ判写真320枚、四ッ切判写真90枚が東京国立博物館に保管されている。また、山城大和巡回の写真種板は、明治7年に博覧会事務局から外部に流れて写真が民間に渡った。

横山松三郎の洋画塾

西洋画塾を通天樓に開いたのは1873（明治6）年であった。壬申検査で高橋由一が建物や風景の油彩画を仕上げている。由一の油彩画は、1866（慶応2）年の横浜のチャールス・ワグマン指導によるが、松三郎はすでに西洋画を熟知していた。“傳彩調和ノ法ヲ暗知スルヲ得 斯クノ如キモノ殆ント三年私カニ真画ノ葢奥ヲ淑スルヲ得タリ 因テ此技藝ヲ皇国ニ起サンヲ思フ 然レドモ覆載之間品物ノ未然タル 箇々筆端ニ尽ス能ハス”。横山松三郎の西洋画習得は1861（文久元）年にレーマンから学んでいたもので、高橋由一より5年もはやく、かつて写真よりも洋画を志し、すでに苦勞の3年間を過していた。東京での写真師横山松三郎の名は有名であったが、恐らく高橋由一の絵をみて情熱をかきたてたに違いない。高橋由一に対して自負心があった。西洋画をすてきれない執着が通天樓に私塾を開かせた。

西洋画塾の塾生として明治7年から2ヵ年間を過した本多忠保が横山松三郎先生を回想しているので引用する⁽³⁰⁾。

通天樓を述べて“先生は其処で仕事をして居た。母屋を出て板二枚並べた八ッ橋じみた小橋を渡って溝を越えると茶室のようなものがある。茶室のむかふは地がなぞへに池（不忍池）へ降って、其処に真菰（水草）などが生ひ茂って風雅なものであった。…（茶室）それが先生の塾なので、其頃村井巖之輔君も一処でした。そして形体の模型をあてがわれて年中それを見ては画いたものです。村井君は円球をやっているが、私は楕円球を模して居た。…そして例の紙の目までつぶして精細に画くと云ふ様な先生の流儀だから一枚に五・六日かかると云ふ様なこともやって居ました。…それを先生の室へ持って行く、先生は格別何んとも曰はない。「よろしい、もっと御画きなさい」と曰ふ丈であった。…尤も形体の間に外のものも交ぜては居ました。自然物がいいと云ふのであわび貝やなにかも画きましたが…先生は絵は斯う画く可きものだと云ふ様なことは曰はなかった。ただ自然物の精細な研究を勧めたばかりです。我々が写真でも見て画かうものなら非常に叱られた、

写真は画とは違ふ、私が写真を用ふるのはただ参考にするのだ御前達が写真を模しては困ると曰はれたことでした。”

横山松三郎の画は、「菊」にみられるように写実であるが、生きている花の色と陰影、構図にあった。背景の色調にも配慮がみられる。高田嘉七氏蔵の油彩自画像は、明治2年頃のもので、襖絵のように下貼りをした和紙に油彩したもので、「菊」は絹地である。

東京に洋画塾が開かれたのは明治初年である。洋画家として知られた高橋由一はウィーン万国博覧会出品作品の仕事を終えて、横山松三郎と同じ明治6年に日本橋浜町に画塾“天絵楼”を開いた。西洋画はあまり知られていないときである。明治7年ロンドンで洋画を学んだ国沢新九郎が帰国して麹町平河町で“新技堂”という画塾を開き、明治9年イタリア人の画家アントニオ・フォンタネージが政府の招きで来日し、洋画の正式な基礎的技術を教えた。横山松三郎の洋画塾“通天楼”は日本洋画塾の中で最も早い時期にあった。

この頃、高橋由一、国沢新九郎が油彩西洋夫人の肖像画を描いているが、横山松三郎も肖像写真と肖像画を勉強していた。

洋画法と写真術の合成

当時、写真には色がなかった。カラー写真の研究で考案したのが写真油絵である。これは肖像写真油絵にみることができ、横山松三郎は異状なまでに肖像に執着していたともいえる。洋画や写真術に入ったときの強い印象が作品にあらわされているのではないかと思う。

函館博物館に横山松三郎ガラス原板があって、その中にプロマイド写真を接写撮影したのがある。9枚づつ縦に並べたもの、1枚づつのもがある。これらの女性プロマイド写真の中に HOWELL 867 & 869 B'WAY、SARONY 680 BROADWAY、GURNEY & SON FIFTH AVE NY、Campbell & Hecker. New York、と活字で撮影者、写真館名のあるものと Lizzie Wilmore とサインしているものがある。確認できたのは43枚中12枚で、HOWELL が7枚と多く、その他にイギリスのものもあるようで、これらは上海で入手していたとも思われる。そのプロマイド写真は、他のガラス原板にみられるように、プロマイドを置いたバックの角を固定してから接写している。9枚づつの写真は、プロマイド写真を洋紙様の上に固定し1枚づつ上から順に3枚を3列に並べているが、9枚があたかも1枚の写真であるかのように、上下左右が直線となって整然と並べられている。

これらのプロマイド写真は、肖像画や肖像写真の教書的なものであった。ポーズをとった人物写真、楕円浮出しの写真、胸から下をぼかし消した写真、肖像写真の中に顔横向きで背中を向けたもの、小卓に本を置いて胸に手をあて、右横をみつめているもの、ソファー

ベットに伏せて何か物思いにふけるもの、頭や編んだ長い髪に花をいくつもあしらったもの、変わった衣装と変化あるポーズといったものなどである。

松三郎の写真に、弟松蔵が写真仕事場で背を向けて顔横向きのもの、中島精一が窓辺で読書しているものがある。プロマイド写真にみる人物写体の光線にはことのほか神経をつかっていたのがわかる。楢円浮出写真は作品によくみられるが、『芸術新潮』⁽³¹⁾に掲載の日本女性の楢円浮出写真は、浮出の下線をバラの花で囲んで飾っている。バラの花は洋画の技法を組み入れたものである。松三郎は植物にも関心があり、水彩画、油絵、写真に作品をのこしている。“先生は朝顔を睨み殺してしまった”というほど観察して写真を撮影していたが、写真に武士姿で何げなく手を添えた小卓の上にも鉢植えのサボテンがある。

写真には画と違って色がなかった。松三郎は油彩だけでなく、水彩画、パステル画⁽³²⁾の作品をのこしている。写真に彩色したものは、鶏卵紙彩色写真である。『写真150年展「渡来から今日まで」』に横山裕氏蔵の「アイヌの一家」がある。鶏卵紙彩色写真で大きさ20.4×25.6、1877（明治10）年頃とある。横山松三郎がアイヌの写真撮影したとすると明治5年でないかと思われる。松三郎は壬申検査でウィーン博覧会出品の油彩を高橋由一が担当し、蜷川式胤と同行しているが、北海道では「澳地利国維納府博覧会出品関係書類」があって、アイヌ関係については、特に細かな要求が開拓使に出されている。「北海道産物之大略」の人造物之部⁽³³⁾“第三 此島中ニ散在スル土蕃之肖像、男・女・男児・女児・酋長・平蕃”とある。土蕃の肖像とあるが、当時のものは発見されていない。蜷川式胤と直接かかわりがあって北海道に精通している横山松三郎が道南地方のアイヌ部落を撮影したとすると、博覧会掛織田賢司が北海道物産の収集を終えて函館の天神社内柳川で公開したのが明治5年7月17日であるから、東京で全国の出品物天覧の秋までと考えられる。この「アイヌの一家」鶏卵紙彩色写真を明治5年とすると、アイヌの写真で最も古く、人類学・民族学的に貴重な資料である。

写真油絵を完成させるまで鶏卵紙彩色写真からいろいろと試みられたが、写真油絵は“印画紙の表面を覆う感光乳剤の膜をそっと引きはがし、その裏面から油絵具で着彩する方法である。ちょっとステンドグラスに似た透明感のある色彩と写真特有のリアルな描写が融合して、不思議なイメージが出現してくる。”⁽³⁴⁾技術的にも難しく、明治14年3月から研究を続けて明治15年2月に成功している。この技術は研究にたずさわった門弟の小豆沢亮一にこの術を授けて、明治17年小豆沢は京橋二十間堀に新案の店を開業して特許申請をした。

陸軍士官学校教師の時代

横山松三郎は、陸軍士官学校の前身である兵学寮とその当時大砲など分解した器械部品

の撮影をしている。

“明治九年陸軍士官学校ニ聘セラル 写真・石版・墨寫真ノ諸術ヲ究メ功ヲ奏ス”

“嘗テ本校ニ於テ軽気球ヲ上ク 先生乞フテ乗ラントス 長官問フテ曰ク 何ノ爲ナリ 先生曰ク將ニ撮影ノ術ヲ試ミントスト 長官乃チ許ス”

横山松三郎は、常に写真術研究に取り組んでいた。陸軍士官学校に写真術と石版術を学生に教える一方で新しい研究成果を次々に発表している。飯塚耕太郎⁽³⁵⁾も“旺盛な好奇心の跡手控帳”、“科学者松三郎の実験”、と新しく発見した資料をみて“横山が写真術の起源に強い関心を示していたことが興味深い。彼の知的な関心が相当広い範囲で高いレベルに達していたことがよくわかる。手控帳のほか、明治六年、七年、十二年の通天樓関係の日記、ゴム印画、絹カーボン写真、電気版写真、さらに説明がある写真など、松三郎の実験の成果を示す見本写真もある。とても一日で見切れるような量ではない。今後の詳しい調査が必要になるだろう。日記やノート類を丹念にあたっていけば、まったく別な角度から新しい松三郎の像が浮かびあがってくるかも知れない。”と横山裕氏所蔵資料について述べている。

横山松三郎の研究に取り組んでいた桑島洋一は、「日本写真界のレオナルド・ダヴィンチ横山松三郎」と評している⁽³⁶⁾。

松本徳彦の「横山松三郎写真資料調査—横山裕氏所蔵の写真及び資料より—」⁽³⁷⁾のリストにも膨大な資料のあることがうかがわれる。

横山松三郎自筆『不朽無變色重寶墨寫真術傳方率』がある。中扉に“佛国大先生ケレノー氏之肖像”が描かれている。その「寫真部 墨寫真方法 標本」に第一條 黒紙製造、第二條 掬取自在丈夫製練、第三條 日光感應度適説などがあって、その墨写真術の方法が述べられている。“後世依之良法不朽精功 先生之厚情与共爲成後世之證 尊師ケレノー先生之肖像ヲ以墨寫真著述之證書遺…明治十年第十一月十日夜燈下ニ記之 横山松三郎謹書”松三郎念願の写真術であった。ケレノー先生とは、パリ生まれの陸軍士官学校図画教師アベル・ゲリノーで、その指導協力で彼は夜を徹して実験をくり返して完成した。この墨写真は不朽無変色とあるように、新しい方法の発見で印画紙の製法が特殊であった。写真師中島待乳も松三郎の門人となって、この写真術を学び、紙を製して作品を明治14年の内国博覧会に出品している。

横山松三郎の陸軍士官学校時代は、写真術研究の時代であった。明治9年から10年までカーボン試験を続け、翌年に軽気球で空中撮影を試み、ゴム印画、絹カーボン写真、電気版写真と写真印刷術研究に余念がなかった。

横山松三郎の晩年

明治14年に松三郎は病気のため士官学校を辞職すると、通天樓を弟子達にまかせて隠居した。通天樓では写真転写による石版印刷が本格化して、京橋に写真石版社を設立している。

“明治十四年士官学校ヲ退キテ石版写真ノ業ヲ開ク 然レドモ専ラ門弟子ヲシテ之ヲ爲サシメ 自チ市ヶ谷八幡社畔ノ草宇ニ退隱シ 草花ヲ植ヘ器物ヲ弄ヒ 朝ニ灌キ暮ニ顧ミ 或ハ琴ヲ撫シ樂シム 興尽レハ石膏添器蠟製ヲ以テ草花ヲ作り 寶貝奇石ヲ琢磨卅(三十)ノ事ヲ知ラザル者ノ如シ”

明治15年8月、横山松三郎は東京府市ヶ谷八幡社内から油画額、38枚を郷里の函館県博物場に寄贈している。この油画額をさがし求めているが、まだ行く方がつかめていない。この油画は、通天樓の西洋画塾の作品であって、画塾での洋画法、日本初期洋画を代表する横山松三郎の洋画の世界が見出されるだろうし、明治24年函館曙町で私塾の絵画専門学校を創立した北条盛英（玉堂）や明治24年函館青柳町で生まれ、京都の竹内栖鳳の竹杖会で本格的に絵を学び大和絵から洋画へと移った北上聖牛。明治28年函館会所町で生まれ函館中学卒業後文展に入選し、東京美術学校に進学した天才的洋画家と嘱望された高桑千代雄らの函館洋画史の系譜の上で、横山松三郎の作品が影響を及ぼしていたかと考える。

すでに死期を覚悟していたかのように、明治17年の春、所有する器械や書類などを調簿に明記して嗣子啓次郎⁽³⁸⁾に託してから帰郷している。老いた母を見舞うが彼自身も病いのため、あといくばくもないことを察していた。その母も9月1日に亡くなってしまう。松三郎は母を見舞ってから東京に戻るが客と会わず、自ら死を覚悟して門弟等に“我命將サニ尽キントス”と告げ、子供や弟子を集めて“其本志ヲ語り、吾カ死スル後猶能ク此ノ志ヲ継キ各其ノ分ヲ尽スベシ 徒ラニ草木ト興ニ枯葉スル勿レト”死の前日、旧作の諸画及びメッキ石膏等に用いる原本器械を陳列して夕方家族を集めて歓談し、夜になって床に就くとき、後の事をたのんで新しい着物をきて明かりをつけ、身体の污垢をみとどけて寢床に入った。その朝“顔兒(貌)猶眠ルカ如シ 時ニ明治十七年十月十五日也 年四十七”生涯を終えた。

“先生幼ニシテ大志アリ 常ニ大ニ生ヲ厚フシ用ヲ利シ物ヲ開キ務ヲ成スヲ以テ自ラ任ス 行止端正仁慈人ニ過ク事ニ臨ミ豁達ニシテ敏鋭 而シテ容姿温雅風彩甚タ偉ナリ 活淡寡欲形骸ヲ土木ニシ 邊幅ヲ修セス 神宇英邁極テ才畧アリ 博覽強記尤モ創造ノ才ニ長ス 寫真術油繪舎密(化学)アリ 妙ニ工製ノ諸術ニ通シ 常ニ自ラ製作スル所ノ品物巧致ニシテ奇雅ナリ 能ク変異シテ理ニ合フ 又武術及ヒ兵書ニ達ス 又禅理ノ微妙ヲ悟

ル 患難因厄ノ間ニ在テ綽々然トシテ未タ嘗テ威容ヲ見サズ”

“常ニ好シテ物理ヲ究尋シ 其ノ理由ヲ得サレハ止マズ 其間飲食寒熱ヲ忘ルルニ至ル 其勤勞精力及ブヘカラザル也”と門人達による横山先生履歴は結んでいる。

横山松三郎小伝を書き終えて

“先生能ク経義ノ大旨ヲ悟ル 然レ雖モ常ニ其讀書ヲ見ル者ナシ 先生記載ヲ好マズ努メテ胃中ニ記ス 常ニ云フ記載ハ忘ルル本也ト”「横山先生履歴」の原稿用紙十一の終りにある。“先生ノ遺記ニ據リ嘗テ聞ク所ヲ併テ謹テ誌ス”を読んで書いてきた。この横山先生傳記は古語漢字の意味合深く、平易に読みくたすことができなかつた。

この小伝を書き終えてから「函館新聞」の明治15年に掲載された横山松三郎関係記事があることを知ったので転載する。

3月8日(水) “○寫眞油畫 兼て寫眞其他油畫等の業に有名なる横山松三郎氏が 今度苦心して發明されし寫眞油畫といふ寫眞と油畫とを合併したる如き一種のガラス寫眞は其工妙なること實に驚くべく其美麗なることも亦た驚くべきものにて 従來のガラス寫眞に油畫の如き彩色を施し 衣裳の色合は素より顔の光澤肉色より金の簪指輪の如きものまで畫く其時のありのままの色をば鮮明に寫出したるものなり 尤も是は同氏創意にてあらず東京九段阪中央なる是も當時寫眞に有名なる鈴木唯一氏が米國へ赴むかれしをり 始めて其寫眞油畫を一見し立って其傳習を望みしも 同國發明人某を更に其傳習を拒み其秘訣を傳えざりしにぞ 余儀なく其寫眞油畫を購求して戻られ苦心して其彩色を施す術を得んと 凡そ一年余も工夫されしが 如何に考るも其法を得ぬに 同氏も殆ど困苦して其法を工夫するまでは他人に示すまじと思ひ込しも 今は術畫きて斯ることには好事なるゆへ横山松三郎氏に示され十一月にて漸く其眞理に合し 見本通り出來上り 試験さるるに何れもよく出來上りしは漸く去二月の事にて まだ東京の新聞にも其事をのせぬ位の事にて 僅かに二三の貴紳が覽に供せし位にて 松三郎氏には此程携帯して所用あつて來函され記者も一見せしが 誠によき出来にてほとんど感心しましたが定めし于今盛んに流行することなるべし”

明治15年四月の「伊藤鑄之助肖像 寫眞油繪」2枚が市立函館図書館に所蔵されている1枚は“創始者横山松三郎製”1枚は“東京九段坂鈴木眞一製”で、同じ写真を横山松三郎と鈴木眞一が着色したものである。伊藤鑄之助肖像写真は、共にガラス原画140×106mmでガラス縁を金紙で貼り、写真裏を黒い和紙で貼って仕上げている。色調は鈴木眞一のが淡く、円形浮出である。横山松三郎のは肌色もよく、着物襟の柄紋には画像膜面の表から着色している。写真原画は全く同じで、同位置から同時に撮影したもので、双眼写真機で

ガラス原板を2枚撮影したのでないかと思う。“試験さるるに何れもよく出来上りし”とは、この写真なのだろうか。「明治十五年四月写 写真油繪」の桐箱に納めた箱書きと写真の木製枠組は後のもので、「男昌吉寄贈」とあるから、伊藤鑄之助の孫の伊藤昌吉が函館図書館に寄贈したときの箱書である。

「函館新聞」明治15年には油画のことについて伊藤鑄之助が書いている。

5月8日(月) “○古人物油畫の顛末 先頃も當港へ來遊されし横山松三郎氏が今度敝社主鑄之助が出京の際 依托して寄送されたる油畫三十五枚を鑄之助より 更に渡邊熊四郎 今井市右衛門 平塚時蔵 平田兵五郎の四君に送り、四君より今度博物館へ出品献納されるるよしにて 其筋へ出願され近日博物場へ出品になり 升右に添へて鑄之助より四君へ送りたる顛末書を其儘載録す

古人物油畫三十五枚元御繪所に秘藏する所の古函にして 兼て油畫と寫眞術等の美術に有名なる横山松三郎君の門弟故亀井竹次郎臨寫したる圖とす 然るに此圖を横山氏の我函館港に寄送せられし所以は 横山君元函館の産にして幼より美術を嗜好し 横浜に遊び寫眞術を下岡蓮杖氏に学ぶ 蓮杖氏は伊豆の国人にして横浜開港の當初に在て外国人に付き其術を学び始めて横浜港に寫眞場を開設す 横山氏同氏に付き学ぶこと久からず 其術を終に卒業して東京上野池の端に寫眞場を開設す 當時東京に於て寫眞術未だ開けず 僅に同氏開設の一場あるのみ 東京寫眞開設の濫觴(はじまり)と云ふべし 既にして同氏寫眞術を修めしかば 更に油畫を学び又耐忍勉強とに因て 修業若干ならずして練熟して其術の妙境に至れり 當時同氏に就て油畫を学ぶ弟子多かるなかに亀井竹次郎(亀井至一の弟)と云ふものあり 明治二三年の頃十二歳にて氏の門に入り 少年妙齡にして天稟に得たるものか能く其妙を得て横山君をして後生恐るべしの歎あらしむ 然るに竹次郎家貧にして生計を顧みざるの急なる資を捨て時を費やして此業を修するを得ず 横山氏之を憫み之をして扶助修業せしめんとするも 當時君も亦家計を顧みざるの急なるを以て竹次郎を養ふ余裕あらず深く共に憾とせしが、さきに彼の寫眞師たる下岡蓮杖之を聞き竹次郎の伎倆後來頼母しきを以て扶助して其志を達せしめんせしかば 竹次郎之に力を得て愈々感奮し 由て前後十年間の久しき横山氏の机下に就て之を修業することを得たり 而して當時修業の際偶々御繪所の古人物の畫を得て竹次郎の模寫せし所 則ち此畫後白川院 鳥羽院 近衛閔白 六條院 摂政曾呂利新左衛門 加藤清正等 凡そ圖たる三十五枚を得たり 巧絶妙絶の畫にあらずと雖も竹次郎 横山氏の傍にあつて修業中のものに係るを以て 丁寧謹肅一々其示教に因て筆を下せしかば 一点一畫悉く油繪の法に合ざるなく實に其眞面目を得たりといふべし [以下次号]”

5月10日(水) “○古人物油繪の顛末〔昨日の續〕 而して此圖は彼の恩人たる下岡蓮杖氏の家に傳へ曾て東京淺草公園に於て展觀に供せしとありき 其後尚傳へて下岡氏の家に存せしが 人生榮古の常なき即今下岡氏家道頓に衰へ 止を得ず此圖を賣品と爲んとし來り横山氏に謀る 横山氏元下岡氏に對しては弟たるの誼あり 而して竹次郎氏に對しては師たるの誼あり況んや下岡氏の家道の衰ふたる 殊に是より先き爾三年前竹次郎の難廿三年にして死去したる此圖 實に竹次郎が多年同氏に就て貧を辞せず苦を甘んじ丹誠を尽し臨寫したる遺畫たるをや 是彼情誼共に之をして他人の手に附し去るを忍びず 金八十圓を下岡氏に贈り此圖を購ひて終に同氏の所有となす。偶々去三月鑄之助上京し 又た性來美術を嗜好するを以て兼ねて交を横山氏に結ぶ故を以て其居市谷の家を訪ふ 談偶々箱館の事に及び同氏之箱館の産たるを以て此圖を箱館に寄送し 永く後代に傳へん事を謀る 鑄之助其意に感し喜び齋し歸りて 其本港公衆の覽に供せんことを希望し 更に之を篤志なる渡邊熊四郎 今井市右衛門 平塚時藏 平田文右衛門四君に倚托寄送して 四君の力に依りて 適宜なる方法を以て之を公衆の覽に供し横山氏の桑梓を懷ふの切なる厚情を我函館港に永く傳へ廣く示さんことを伏して希望すと云ふ 五月五日 伊藤鑄之助”

博物館に寄贈の35枚の油画類は、門弟亀井竹次郎が横山松三郎の御絵所（通天樓の西洋画塾）にあった古人物繪を描いたもので、松三郎が指導した弟子の傑作であった。竹次郎は属望されながら23才で早世したが、遺作を郷里の函館博物場で公衆に覽てもらいたいと伊藤鑄之助に松三郎が依頼した話である。

函館県博物場に横山松三郎が寄贈したのは“明治15年8月、油画額 38枚”であり、その内3枚は横山松三郎の作品と思える。

伊藤鑄之助と横山松三郎は、美術を愛好する友人であり、石版術と活版印刷術の関係もあったのだろう。写真油繪の試作に伊藤鑄之助の肖像写真が使われ、鈴木真一と創始者横山松三郎の2枚があるのは、社主伊藤鑄之助の記事から、写真油繪が試作に成功したときのものと思われる。

横山松三郎の高輪泉岳寺にある墓碑銘「横山君墓碣碑。伊勢矢土勝三撰 正五位日下部東作書并題額 井亀泉鐫字」に業績と履歴が刻まれている。

横山松三郎は、函館において木津幸吉、田本研造に写真印画法を教え、田本は弟子と共に北海道の写真を発展させた。幕末の函館でロシア人の洋画法と写真術を初めて研究して大成した卓見と創始者の偉業は、短かい時間の調査では述べるに足りない。内容の不確かさによる誤解も難れないであろう。ことに上海での48日間の滞在中の洋画法と写真に関する接写法、立体写真などについては、ガラス原板写真から推察したが、埋れていた事実が

これから発見され、修正が加えられると思うが、横山松三郎履歴を整理してまとめてみた。

この執筆にあたって多くの方々からご指導とご助力をいただいたが、十分に成果をなしえなかった点が多々あると思う。

〔注〕

- (1) 函館の字は、明治2年から箱館が函館となったので、文中で明治2年以前は箱館の字を用いた。
- (2) 高田義松氏口述、「明治元年宗門人別調」に姉ソノとあり、妹チヨはミヨの誤りである。
- (3) 高田義松氏口述。
- (4) 松本徳彦氏草稿。「横山松三郎年譜」。
- (5) 『ペリー日本遠征記』、馬場脩『ペリー提督箱館来航誌』函館商工会議所 昭和49年5月
- (6) 横山松三郎関係、立体ガラス写真、台紙貼立体写真、立体写真ビューア（写真監視眼鏡）の寄贈者小島哲次郎氏の祖先。
- (7) 小嶋又次郎『嘉永七甲寅年五月 亜墨利加一条写』函館郷土文化会 昭和28年9月。
- (8) 平尾魯仙『箱館夷人談』安政3年 市立弘前図書館蔵。
- (9) 秋月俊幸「ロシア人の見た開港初期の函館」『はこだて』第3号 函館市編さん事務局1986. 3
- (10) 高田義松氏口述。高田屋六代目の義松氏は母親を若くして亡したので、3才のときから祖母のミヨに育てられ、高田家のこと横山松三郎のことなどを聞かされていた。
- (11) 本多忠保「横山〔松三郎〕先生のこと」青木茂編『明治洋画史料 懐想篇』中央公論美術出版社 昭和60年9月
- (12) 啓次郎は、横山松三郎の妹ミヨと高田屋四代目篤太郎との子供である。(11)を参照。
- (13) 西村恵訳・H・Aティレイ著「日本・アムール川・太平洋」（抄）『はこだて』第4号 函館市史編さん事務局 1987. 1
- (14) 「開港後五年間外国船舶入港表」『沿革史附録』函館税関所蔵
- (15) 神崎昇訳 グザーノフ著『白ロシアのオデッセイ』ゴシケビッチを顕彰する会 1985
- (16) 井上幸三「箱館日記」『マクシモービチと須川長之助』岩手植物の会 1981
- (17) 村元直人「わが国黎明期の博物学と函館」『函館私学研究紀要』第16号 1987
- (18) (16)の「箱館日記」
- (19) 斉藤虎之助『函館海運史』函館市 1958
- (20) 木村克彦「営業写真師の開祖下岡蓮杖小伝」『月刊ウイーク』5月号 日本放送出版協会 平成2年5月
- (21) 注(11)
- (22) 注(11)
- (23) 注(4)

- (24) 高田屋の蔵番浜田寅吉の子孫浜田孝作氏口述（昭和53年4月25日）
- (25) 注(2)
- (26) 注(2) 高田義松氏は函館春日町の松蔵の家で写真機を玩具にして遊んでいても高田屋の嫡子ということで少しも怒られたことは無かったという。横山松蔵は写真だけでは生活できなかつたので、経師（表具）をやっていたという。
- (27) 注(4)
- (28) 注(4)
- (29) 東京国立博物館『東京国立博物館百年史 資料編』 昭和48年3月。明治4年7月文部省設置。蜷川少史は12月外務大録として文部省博物館御用兼勤を命ぜられ、明治5年正月太政官勤務で正倉院開封、宝物古器物調査にあたる。
- (30) 注(11)
- (31) 飯沢耕太郎「未開の曠野を駆け抜けた孤高の写真師横山松三郎」『芸術新潮』1990年2月
- (32) 注(4)
- (33) 千代肇共著「明治期における北海道の博物館(1)」『北海道開拓記念館調査報告』第29号 1990年
- (34) 注(31)
- (35) 注(31)
- (36) 注(31)の『芸術新潮』
- (37) 注(4)の資料
- (38) 注(11) 啓（慶）次郎は、横山松三郎の妹ミヨの子である。松三郎の弟松蔵は慶次郎の叔父にあたる人で、横山松三郎の跡相続は、弟松蔵が文六となって相続した。
- 明治17年11月8日の函館区役所に提出した「改名願」に、函館区大黒町19番地 願人横山松蔵証人として上記同住所横山松蔵姉夫 松谷久吉。同住所 高田篤太郎が連名である。この住所は松三郎の妹の夫である高田篤太郎の所有地である。

〔補注〕

- (1) 桑島（1988）による松蔵明治34年54才死亡とすると、松三郎がゴシケビッチから写真を学んだのは1861年となり、本文ならびに年譜を訂正しなければならない。
- (2) レーマンをロシア人と考えたが、魯国軍艦が箱館入港のとき外国人が乗船していた例があるので、フランス人などとも考えられる。
- (3) 〔横山先生履歴〕の文中 香港ヨリ帰ル は、健順丸が上海行きに変更になっていることから特に注記していない。

2. 函館博物館と横山松三郎関係資料

函館博物館は、1879（明治12）年5月25日に開拓使函館支庁仮博物場として開館した。当時函館仮博物場と呼んでいたが、その後函館県博物場、函館博物場となり、名称が水産陳列場と改まり、昭和23年に総合博物館としての市立函館博物館となって現在にいたる。

ここで、明治の函館博物館に所蔵された写真、絵画資料を述べてから、現在の横山松三郎関係資料を紹介する。

明治の函館博物館資料

函館仮博物場は、現在の博物館が建てられている函館公園内にあつて、建物が北海道指定有形文化財になっているが、展示面積が102.9 m²しかなかった。この建物に写真65枚が展示してあつた。北海道産物、珍奇な動植物など2,548点の中に写真が65枚もあつたことは、当時の博物館として特色を持っていたことがわかる。開場準備のとき画工一瀬朝春のほかに技術生が5人もいた。写真65枚の内容は明らかでないが、明治23年の博物場列品資料目録関係に明治10年7月の「千島国土人写真貳枚入額 壹個」、明治13年5月16日北条盛英撮影の「函館大石松写真」、明治13年9月「古代陶器矢ノ根石写真額 壹個」工部省雇教師ジョン・ミルン氏献納、明治13年「七重旧勤業試験場米国種綿羊写真額 壹個」、明治17年7月写真師田本研造寄贈の「北海道土人写真貳枚入額 五四個」がある。その他の写真には寄贈年月がないが、田本研造寄贈の「五稜郭伐氷写真額 壹個」、「魯国浦潮斯徳（ウラジオストック）写真額 壹個」、「函館気候測量所写真額 壹個」があつた。また“出品目”に「写真、佛人タキユール氏發明ノ一種 壹個、明治十五年八月卅日 函館区富岡町五番地 北溟社伊藤鑄之助出品」がある。伊藤鑄之助は、明治10年3月10日に鑄之助ら7名で北溟社を設立し、北海道最初の新聞である「函館新聞」が明治11年1月7日に創刊した。新聞発行の願出は渡辺熊四郎（横山松三郎が肖像、写真油絵をつくる）であるが、北海道の活版印刷であつた。横山松三郎と伊藤鑄之助は交遊関係にあつて、写真油絵を最初に作ったのが伊藤鑄之助肖像写真である。

横山松三郎は、函館県博物場に画を寄贈している。列品目録に「油画額 三拾八枚 明治十五年八月 東京府市ヶ谷八幡社内横山松三郎献」とある。

これらの資料は、現在博物館にはないが、明治28年4月1日に市立函館尋常中学校（函館中部高等学校）が開校したとき、函館博物場関係資料が移動しているので、開校のときに中学校に行ったと考える。現在函館中部高等学校に「函館大石松写真」、「函館気候測量所写真」など旧蔵の博物館関係資料がのこされている。

館蔵の横山松三郎関係資料

函館の横山松三郎関係資料は、横山家の相続人である横山松蔵（文六）が所蔵していた資料と相続人として東京から運ばれた資料。また、何らかの形で函館の資産家が所有した資料などである。横山松蔵資料は、函館の春日町に転居し、松蔵の姉にあたる高田ミヨと高田家の六代目義松氏に引継がれてきた。高田義松氏は、母親が早世したため3才のときから祖母に育てられ、春日町の家で祖母ミヨと住んでいたことがある。市立函館図書館にある資料は、春日町時代のものと昭和初年に高田義松氏が大日本人造肥料株式会社に勤務して社宅にいたときに罹災した資料である。この火災は、当時一般家庭で使用されていない加圧式ポンプによる石油ストーブが原因で、加圧式ポンプから火が吹き出して火災になり、ガラス写真などが焼けた。この焼けたガラス写真と「新造双眼目鏡壹組」が図書館から市立函館博物館に移管された。

博物館の横山松三郎関係資料は、「新造双眼目鏡壹組」、「ガラス原板箱付」と小島家旧蔵、小島哲次郎氏昭和44年寄贈資料である。これらの資料を紹介する。

ガラス写真原板

ガラス写真原板は木製整理箱に入っていたが、その状態は箱蓋がなく、3箱の桐製整理箱は火災による燻蒸で黒褐色に外部変色している。その1箱は後部が炭化して欠損している。ガラス写真原板は、全部で95枚あるがいずれも上部が加熱と水蒸気によって原像膜面が乳白色化、褐色化して細かなひび割れ、斑点状剥脱があり、すでに膜面剥脱がひどいものもあって、元の状態にあるものが少ない。整理箱と原板を対証すると必ずしも箱に入っていたものでなく、他のものから移し入れたものが多く、写真整理箱のものだけでない。

整理箱Aは、長さ31cm、高さ8.3 cm、横幅9.8 cmで、ガラス原板を縦にさし入れるようになっている。51枚入れで、内枠に5 mmほど高く箱蓋が納まるようになっている。前面に整理の貼紙があり、「□□内 四拾八枚」とあり後面の貼紙はわずかに残って33、38の数字だけがみえる。整理箱Bは、Aと同じく51枚入りで、後部の上方が焼けて炭化しているが、長さ30.5cm、高さ8.9cm、幅9.7cmである。右横に蓋との合せ口に丸横の焼印があって横字下部がある。貼紙には未、588、640だけが上から下に並んでいるのが確認できたこの数字は未年の588というガラス原板の左上部に書かれた整理番号である。整理箱Cは42枚入れで、長さ29.3cm、高さ8.9cm、幅10cmである。正面合せ口の焼印、丸横の横字下部が付いている。貼紙には「師弟交友□外、景色二枚写真、三枚眼力（物事を識別する能力）人壹枚と三行があって、次が墨で文字を消し、想（絵）枚数四拾貳枚」とある。

ガラス原板は、原像膜面剥脱の危険から保存管理上計測と密着焼付についてすべて行う

ことをさけた。

ガラスの大きさと厚さは7種類である。Aは長さ108.8mm、幅77.7mm、厚さ2.7mm、Bは長さ108.4mm、幅79.0mm、厚さ1.8mm、Cは長さ107.1mm、幅77.2mm、厚さ1.3mm、Dは長さ107.0mm、幅77.6mm、厚さ2.7mm、Eは長さ106.3mm、幅77.4mm、厚さ1.7mm、Fは長さ80.0mm、幅61.0mm、厚さ1.8mm、Gは長さ71.3mm、幅60.8mm、厚さ2.0mmで、厚さだけでみると厚いので2.7mm、2.0mm、1.8mm、1.7mm、1.3mmと5種類のガラスが使用されている。このガラスで明治初期特有の板ガラスにみられるわずかに縦長の気泡が残っているのもあるが、板ガラスは安政6年から函館に輸入されているので、日本製でなく、外国からの輸入ガラスを使用していたことも考えられる。

確認できたガラス写真は、ガラス写真そのものが画像である「写場における弟松蔵」とガラス写真ネガの膜面に修正を加えたのがあるが、その多くはガラス湿板写真である。これら横山松三郎のガラス写真には撮影のときに、画像をつくる液をガラス板に塗って、それを固定したときの跡がガラス写真の四角に残っている。解像力は驚くほど高い。

被写体は、写場での写真器具類が2枚、写場での弟松蔵、写場での小卓、椅子、木箱、西洋人形、植木木製鉢植などを置いて写したもの、いろいろな人物、野外での宴会記念、ある鉱山現場、プロマイド集合写真、プロマイド接写写真、洋画（19世紀初期の家族）の接写写真、仏舎利塔と南洋の木がある写真の接写、解剖人体模型写真の接写、軸物の接写、盆栽、変化朝顔の接写写真がある。

写真器具類には、蛇腹付写真機、立体写真機、湿板ホルダー、取枠、箱枠、舶来接写レンズ一式箱入、超接写操置台と木製スライディングボックス、ステレオレンズ鏡筒がある。なかに新しく造ったレンズ取付座板、ステレオ写真のレンズ取付木製部分、スライディングボックスがみえる。接写操置は、ダゲレオタイプにみられる木製スライディングボックスを幾つも連続させたもので、横山松三郎考案のものと考えられることができる。

新造双眼目鏡とステレオ版写真

ステレオ写真は、1851年のロンドン、ハイド・パークで開かれた大博覧会に出品されてから1850年代はイギリスとフランスなどヨーロッパで大流行し、どこの家庭でもステレオ・ビューアと写真があったといわれる。

横山松三郎の立体写真は、上海での影響と思われる。「新造双眼目鏡 壹組 替玉貳個付 横山」と墨書きされた木箱は平織紐で蝶結びになっている。横山松三郎の立体写真の初めは、明治2年日光全山の撮影と思われる。この新造双眼目鏡は、ビューアなどを作製するときのもので、明治2年以前で1866（慶応2）年頃に造った可能性がある。

この木箱に本体と双眼の替玉2個があり、他に大形レンズで周縁に赤色のピッチが付着しているのが布に包まれていた。本体は木製組立式で赤味を帯びた黒色の色ニス仕上げである。台板に双眼と単眼レンズが取付けられていて、交互に固定できる仕組みになっている。台の後方に折畳みの磨ガラスがあって、前後移動ができる。大きさは、基台が34cm×20.8cmレンズと磨ガラスが取付けられている台板が31.2cm×18.9cmである。かなり精巧な造りで、レンズと磨ガラスの台板を上部に上げると台板の後部に真鍮の蝶番が付いて45°まで傾斜することができる。角度調整は台板にある透彫飾りの脚と基台に取付けた細長い真鍮板の4つの窓によるが、脚の先端を真鍮の小窓に移動することによって角度調整ができる。台板の前部にある双眼部は、付属の替玉である双眼部と形が同じで、それを立てると両側の止金で固定できる。単眼レンズは、直径88mmで木枠にはめ込まれている。木枠の両側に真鍮の棒が2本あってレンズを支えているが、木枠は真鍮棒を通してあるのでレンズを上下移動できる。単眼レンズを使用のとき、双眼レンズ枠を内側に倒すことによって、単眼レンズ枠を上部移動させて双眼レンズ枠の基台に固定できる。基台の溝に真鍮棒はまり、止金で固定すると、レンズ位置は双眼レンズ固定位置と同じになる。真鍮棒は台板に固定しているが、315°の角度で台板の下部内側に納めることができる。磨ガラスは、上部に透彫飾りの木枠に固定されていて、前面内側にガラス写真を置くようになっている。これも折畳みできるが、固定したレンズと焦点距離をきめるために背景磨ガラスの前に置いたガラス写真を移動することができる仕組みになっている。単眼レンズの使用は、ガラス写真修正用と考える。

新造双眼目鏡は、研究と職業用であったと思われる。

小島哲次郎寄贈品に、木製箱形立体写真ビューアと2種類の立体写真がある。立体写真はビューアに使用のガラス立体写真と別のビューアを使用した台紙貼立体写真である。これが横山松三郎関係資料であると判断したのは、台紙貼立体写真に横山松三郎しか撮影できなかった写真があったからである。

台紙貼立体写真は、総数71枚があり、松本徳彦氏によって横山松三郎撮影と確認できたのは「横山松三郎アルバム」にある7枚である。台紙墨書「第貳號 内宮側面ノ五」、「第貳拾八號 御常御殿」、「第三拾九號 内宮百分ノ一ノ雛形ノ圖」、「第四拾壹號 東京池之端仲町横山氏樓上ヨリ湯寫ノ方遠望（降雪の後）」、「第四拾六號 御局所」、「第六拾九號 内宮側面ノ四」、「第七拾三號 勢列二見浦」これらに番号があって、説明は番号のあとに別の人によって書かれている。

これら71枚の台紙貼立体写真をみると、台紙、その大きさ、写真と写真との間隔、写真

の上を円く切っているものと、そうでないものがある。台紙の大きさ17.4cm×8.4cm で2枚の写真が1mm間隔で、写真上部を円く切ったものと四角い写真で台紙17.5cm×8.8cm と17.5cm×9cm、厚さの違うものが3枚ある。裏墨書「第貳拾七號 紫寢殿料面」と「第貳拾八號 御常御殿」は写真と写真の間隔がないように貼られている。

その他は、同じ大きさであるが台紙色違いが5種類あって、多くは台紙が両面色薄黄色を帯びた白で番号と説明がある。次に多いのが表薄水色裏黄色で6枚、番号だけで説明がない。同じ台紙で裏表が反対に写真を貼っているのが1枚ある。表裏があさぎ色で「第四拾號 御常殿」と台紙大きさが少し違う17.2cm×8.5cm で厚さ1.4mm がある。この2枚は四角い写真が貼られ、写真が中央になく、左寄り、2枚の写真間隔が5mmと幅広である。このようにみると台紙による分類ができ、その厚さからすると、1.4mm、1.35mm、0.9mm、0.8mm、0.6mm、0.4mm と6種類の台紙が使われていて、薄黄色を帯びた白台紙の0.9mmが最も多く、表薄水色裏黄色の台紙である0.4mm のものが最も薄手である。

このように小島哲次郎旧蔵の台紙貼立体写真は一定でなく、横山松三郎が暗箱写真ビューアーから自然光で立体写真がみえるように研究したときの試作品資料で、市販の立体写真ではない。この写真に壬申検査のものがあり原板が明治7年10月まで博覧会事務局で保管されていたことから、明治7年以後とも考えられるが、壬申検査のステレオ判写真320枚が東京国立博物館にある（池田1987）ことから、明治5年頃に試作したものと考える。

小島哲次郎寄贈のガラス立体写真

このガラス立体写真は何枚もの木枠組ガラス写真が下面を布で接着して袋状になっている。2組あって、同じく寄贈になったガラス立体写真ビューアーに使ったものである。

ガラス立体写真ビューアーの両端に木製ハンドルがあり、それを抜くと軸が木製で横断面方形で、袋状に連続したガラス立体写真に差込んで、ハンドルを回転すると木枠ガラス写真が1枚ずつ立って立体映像が見えるようになっているものである。

ガラス立体写真Aは、26枚1組で布は細かな目の平織物で、木枠組ガラス写真下部を貼り付けているが、下部両端に薄い真鍮板をあてて平頭釘を2本ずつ打ち込んで平織布を固定している。ガラス木枠は厚さ9mm、幅18mmの黒塗南洋材で、底板と両側板に溝をつけてガラス原板をはめ込み、ガラス原板固定のため厚さ3mmの杉板を平頭釘で打ち込んでいる。この大きさは、縦が10.5cm、横19.5cm、厚さ9mmである。ガラス原板は、2枚重ねで縦8.65cm、横17.1cmである。紺色和紙で周縁を貼り付け、南洋材枠組にはめ込んでいる。2枚合せのガラス厚さは4.8mm である。この厚さは両面に貼った和紙の厚さを含むものでガラスは、ガラス写真分類のG、2mm ガラスと考えてよい。画像は「日光龍頭

瀧」と墨書、庚申山、写真山中写真道具運搬の景状、人力車など日光が中心となっている。ガラス立体写真Bは、24枚1組で南洋材木枠など同じであるが、ガラス原板の木枠固定布が、やや荒い綿織物で、平頭木ネジ止めである。画像は、鏡に映す2人女性、テーブルクロスの上に花瓶と飼育箱から出たハムスター、不忍池と思える蓮池、紫寝殿側面、小御所内部、手向山八幡宮がある。

ガラス立体写真Aは、おもに日光と風景であるが、ガラス立体写真Bは壬申検査と写場通天樓内などが混っている。AとBは布と木枠止めが違う。この2組の中に、2枚の画像撮影角度が極端に異なり、これで立体影像が可能かと思われるのがある。これらからAは明治2・3年、Bは明治5年頃と考えてよいのでなかろうか。

ガラス立体写真ビューアー

柱状形で前に視部の双眼が取付けられて、後部に光線をとる磨ガラス窓がある。両側に回転の木製ハンドルがあって、天井部にガラス立体写真を出し入れする観音開き扉が付いて開いた扉ストップ（真鍮製）がある。全体南洋材で黒褐色の着色ニス仕上げで、木組接着は膠である。大きさは、高さ51.5cm、横幅29cm、奥行30.5cmである。双眼視部は顔が密着できるように全体が前に出ていて、額部と鼻部の木枠が形良くくぼんで作られている。双眼部は取り出しができ、前方に引き出すとプッシュ・ポイントがあって、上部が開く。内側レンズ磨きのため、片側は双眼で覗きみるときの交互視角の重複を避けるための鉄板53.6×6.0cmが2枚V字形にはめ込まれている。ここに付けられているプッシュの装置蝶番金具と平頭木ネジは真鍮製である。取り出しができる双眼部木製枠組は、15.6cm×9.2cmで視部が2.4cm前方に出て、3.7cmがスライドして箱内に填込みになっている。双眼レンズは径4.5cmが2個で、その間隔は2.7cmで、レンズの固定は外からレンズを入れて丸味のある環状レンズ枠（材質不明で赤味がかかった黒褐色）で固定している。

新造双眼目鏡とビューアー

ガラス立体写真ビューアーは、暗箱の中にガラス立体写真を入れてハンドル操作で画像をみるが、自然光で見るビューアーを松三郎は考えていた。小島家旧蔵の台紙貼立体写真である。縦78.1mm×横71.5mmの方形の画像を5.4mm間隔で台紙に貼ったもの、縦88mm×横78.2mmと76.6mmの方形画像を間隔なく貼ったもの（第貳拾七號 紫寝殿斜面）、上部円形の原画縦中央70.8mm×横65mmを6.2mm間隔で貼ったものがあるが、その大半の写真間隔はガラス立体写真と同じ1mmほど間隔のあるものである。

横山松三郎ガラス写真に、ステレオスコープがあった。プリユースタ型かも知れない。写真原板は画像膜面が甚々しく損傷し、剥脱しているが、写場で何人かが写っていた。剥

脱をまぬがれた左端弟松蔵が肘掛けた小卓子の上にステレオスコープがある。舶来品である。この写真は通天樓で撮影したものであるが、上海で入手したものであろう。

新造双眼目鏡の替玉2個は、径38mmレンズ2個が縦57mm、横133mmの木枠に填込みになっている。レンズは金属枠フェルト包みで固定し、レンズとレンズの間隔は27mmである。木枠の上部レンズ間が山くぼみになっている。双眼目鏡のレンズ間内側には鉄板をU字形に曲げてネジ止めしているが、人間の目の視角交叉を防いで立体像を鮮明にみせるためである。双眼目鏡替玉は、本体の双眼目鏡と交換でき、左にスライドして取りはずし、目鏡に付いた2つの足をはめ込んで右スライドさせると固定する。

ガラス立体写真ビューアの双眼レンズは、径39mmで環状枠で固定しているが、レンズ間隔は新造双眼目鏡のレンズ間隔27mmと同じである。レンズの取付けとレンズ間隔をみると何らかの関連があった。ガラス立体写真ビューアは、横山松三郎所有のものであったか。旧小島家が横山家以外から入手したかについて確認がなされていなかったが、「ガラス立体写真B」中に「鏡に映つす2人女性」があり、2枚の原画の1枚に椅子に腰掛けた女性の右下に、この箱形ガラス立体写真ビューアの上部、視見部分が写っていることから、横山松三郎所蔵品であったことがわかった。この写場は、写真器具類やその他を撮影したときの敷物の類似から写場通天樓と判断できたものである。

函館の写真監視（のぞき）眼鏡とビューア

函館では明治6年頃に写真監視眼鏡を東京から取り寄せて函館写真眼鏡店を開業していた。函館の豪商で篤志家であった初代渡辺熊四郎、隠居名孝平が自伝『徳馨録 大正癸丑年秋九月』を書きのこしている。

「明治6年頃^{よちいひ}沃度無湯開業并に写真監視眼鏡開業の事」に「東京浅草にて日本の名所を写真に撮り監視眼鏡にて場を開ける者ありし故、之も函館では其時分蒸気船は無し 陸に行くには江戸迄三十日も経れば女子供は亦も東京及京、大坂の寺院又日光等の景色を見ること成難き故 せめて此写真にて見せたらば皆が喜ぶならんと思ひ 是も三名（魁文社の仲間）の者が相談して八幡坂 今日の写真屋田本の地所を借りたり、最も此写真の原料を製造するは浅草茅町の写真師内田九一と云へるなり 同人は余が長崎に居りし時の朋友にてありし故 同人に頼み度々写真を取替へる様に製造致させ、又監視眼鏡は余の懇意なる東京浅草黒船町岩崎惣吉と云へる者が製造致す故 其者に頼んで拵へし所 市中大喜びにて日々夥しき見物人來れり、由て暫くの間、写真を取替へては見せし事あり 其時眼鏡の番人は今の新聞配達者の種勘七でありし。」とある。現在は立体写真ビューアとかステレオスコープと呼んでいるが、明治初年の函館では「写真監視眼鏡」と呼んでいた。

横山松三郎は、初代渡辺孝平の写真油絵を作っている。四ッ切版額入 額は黒漆塗で上に屋号三ツ星一金浮出、上下左右に鳳鳥と花を象嵌で飾っている。

横山松三郎資料でないが、館蔵品に、着色写真で上部を円く切った台紙貼立体写真がある。明治の中頃過ぎと考えるが、大正時代になるとこうした自然光でみる立体写真が東京で改良普及した。「大正11年8月13日、東京本郷駒込神明町小林治兵衛編集印刷発行の花道会」のものは、木製で簡単な組立のビューアと台紙貼立体写真が一組になっている。花道会の先生による作品写真が間隔をあけて1枚撮りの写真が台紙に貼ってある。ビューアを“覗見器”と呼び「浮き出る写真の見様」に、その組立と写真の見方が図入りで印刷してある。覗見器は軸となる細板に双眼ガラス枠板を前面に嵌込んで固定し、細軸板の後方から台紙を上から挿入する針金付台板をはめ込む。細軸板をスライドさせるだけの、いたって簡単なものである。この双眼ガラス枠板の形は、横山松三郎の新造双眼目鏡と同じ形で、レンズ間の上部が山形にくぼみ、U字形ブリキ板の代りに、レンズ間内側に方形の板を取付けるだけになっている。

明治・大正・昭和初期に流行して普及した立体視写真は、いまでは見かけることもなくなってしまった。

横山松三郎関係の館蔵品は、幕末から明治の日本写真研究史の上で貴重な資料である。

おわりに

横山松三郎の名は、函館で洋画や写真に関係する人達に知られているが、その偉大な業績がこれまで埋れていたのである。「横山先生履歴」に接して書くことのできなかつた人となりもある。それは石膏、漆器、ろう細工の草花の製作や武芸にも通じて兵書を読解し禅裡を探った学者でもあったことなどである。画塾生の“画の談義がいつの間にか修身談になってしまうこともしばしばであった。”横山松三郎の精神面は“門生悉く天稟の才幹を発揮し”洋画界、写真界など活躍したと評されたのである。自からに厳しく自から道を求めて、心情は風采と大いに異なり温順でよく人をなつけたといわれている。墓碑の院号にある“温良院”は人となりであった。

「横山先生履歴」には私的なことは述べられていないが、2人の愛娘がおられ早世されたようである。

横山松三郎研究は、函館幕末史研究と結びついていて、新しい問題に直面した。画家レーマンは、“連日山幽谷の間に寫にのぞみ、ただ真景を黙視するのみ、その手筆を見るなし”重荷の器具を背負って山間に踏み入り、野宿した松三郎は、“其の傍らを離れず注意之を

熟観し、逆に傳彩調和の法を暗知するを得”と書かれているが、自由貿易港となって2年後に函館に上陸した画工レーマンの目的は何であったのだろうか。1861年はロシア軍艦14隻、イギリス軍艦2隻と商船はイギリス9隻、アメリカ8隻が入港している。ロシア皇帝のある使命を持っていたのかも知れない。

松三郎の写真試作の年代は武田斐三郎が諸術調所の教授役として舎密（化学）を教えたことから推察した。

横山松三郎が写真術と洋画法の見聞を広げたのは上海であった。約1ヵ月半の滞在は技術の習得こそできなかったが、英語や仏語は竹田塾である諸術調所の塾生の協力である程度理解できたであろうし、当時の写真師が知り得なかった欧米文化を学んだ。塾生の語学力は月6度の厳しい試験を受けなければならず、山尾庸三（宮中顧問官）、前島密（郵便制度創始者）、井上勝（鉄道制度創始者）などが輩出した。

横山松三郎資料の館蔵品は、初期写真術研究資料とみることができる。1850年代に西欧で流行した双眼立体写真と接写法である。双眼レンズによる立体写真は、“小卓子のステレオスコープ”と「新造双眼目鏡 壹組」、「双眼立体写真鏡」、試作のガラス立体写真2組、台紙貼立体写真、双眼カメラと双眼レンズボードである。

接写は、ガラス原板にある写真器具にみられる接写レンズ一式のケースと松三郎考案と考えられる木製箱を連続させた接写装置である。作品には、ニューヨーク、ブロードウェイなどプロマイド集合写真、さらに各プロマイドの接写写真、変化朝顔の接近写真、明治天皇・皇后両陛下の御真影完成前の写真である。

これから調査しなければならない問題も少なくないが、写真器具製作が函館であったのでないかと思う。幕末から明治にかけての函館は、洋式造船の発達と舶来品の輸入、外国人の居留といった背景にあって、真鍮製品や洋家具など優れた職人がいたことの調査など。

こうした事柄については、今後の研究に期待したいと考える。

原稿執筆にあたって、特別展「北前船と高田屋」でご指導をいただき、資料の提供を賜った高田屋六代目故高田義松氏と七代目高田嘉七氏に感謝申し上げますと共に、横山松三郎年表資料の提供と助言をいただいた松本徳彦氏をはじめ吉村博道氏、松平乗昌氏、渡辺道子氏、葛西公平氏、佐々木利和氏、小山田宗且氏、田川裕治氏、市立函館図書館、市立函館博物館職員の方々にご協力とご助力をいただいたことにお礼申し上げます。

参考引用文献

- 小島又次郎『嘉永七甲寅年五月 亜墨利加一条写』 1854年
- 平尾魯仙『箱館夷人談』 安政3年 1856年
- 亀井至一・下国熙之輔『横山松三郎伝記』「横山先生履歴」明治17年10月18日 1884年
- 渡辺熊四郎自傳『徳馨録 大正癸丑年秋九月』 1913年
- 『沿革史附録』「開港後五年間外国船舶入港表」 函館税関所蔵 年不詳
- 越崎宗一『北海道寫真文化史』 新星社 昭和21年9月 1936年
- 東京国立博物館『東京国立博物館百年史・資料編』 昭和48年3月 1973年
- 斉藤虎之助『函館海運史』 函館市 1958年
- 函館市『函館市史 史料編第一巻』 昭和49年3月 1974年
- 馬場脩『ペリー提督箱館来航誌』 函館商工会議所 昭和49年5月 1974年
- 市立函館博物館『第4回日本海文化展 北前船と高田屋出品資料目録』 昭和53年7月 1978年
- カメラレビュー増刊『クラシックカメラ専科』 朝日ソノラマ 昭和53年10月 1978年
- 桑島洋一「洋画・写真・印刷の開祖者 横山松三郎」『箱館高田屋嘉兵衛』 高田屋嘉兵衛顕彰会出版委員会 昭和54年7月 1979年
- 函館市『函館市史 通説編第一巻』 昭和55年3月 1980年
- 井上幸三『マクシモービチと須川長之助』 マクシモービチ「箱館日記」 岩手植物の会 昭和56年6月 1981年
- 千代肇「東蝦夷地に君臨した高田屋嘉兵衛—箱館の高田屋一族とその業績—」『季刊北方圏』 '81 SUMMER, VOL.36 1981年
- 千代肇「新島襄日本脱出の背景 —箱館と福士成豊について」『新島研究』No.63 同志社新島研究会 1983年1月
- 渋谷四郎『北海道写真史 幕末・明治』 平凡社 昭和58年11月 1983年
- 谷澤尚一「幕末・箱館ロシア病院に関連する史料」『はこだて』第2号 函館市史編さん事務局 1985年8月
- 青木茂編『明治洋画史料 懷想篇』 中央公論美術出版社 昭和60年9月 1985年
- 竹田恒徳『明治天皇と偲びたてまつる 臨幸百十年特別展』 霞会館 昭和60年10月 1985年
- 東京国立近代美術館『写実の系譜 I 「洋風表現の導入」江戸中期から明治初期まで』 1985年10月

- 秋月俊幸「ロシア人の見た開港初期の函館」『はこだて』第3号 函館市史編さん事務局 1986年3月
- 文芸春秋社「新発見明治4年のプレスアイ」『週刊文春』7月24日号 昭和61年 1986
- 読売新聞社「東都第一の写真師横山松三郎が遺した江戸城・人・風景」『週刊読売』7月27日号 昭和61年 1986年
- 西村恵訳、H. A. ティレイ著『日本、アムール川、太平洋』(抄)『はこだて』第4号 函館市史編さん事務局 1987年1月
- 村元直人「わが国黎明期の博物学と函館」『函館私学研究紀要』第16号 1987年
- 池田厚史「明治の文化財記録・横山松三郎・小川一真」『日本写真全集第9巻 民俗と伝統』小学館 1987年7月
- 渋谷四郎「横山松三郎の生涯」『日本写真全集第9巻 民俗と伝統 月報』1987年6月
- 桑島洋一「新島襄の函館脱出時の写真」について 『同志社談叢』第8号 同志社社史資料室 1988年2月20日
- 多木浩二『天皇の肖像』 岩波書店 1988年7月
- 写真150年展実行委員会『写真150年展「渡来から今日まで」』コニカプラザ 1989年8月
- 松本徳彦「横山松三郎履歴、横山松三郎=写真・資料調査—横山裕氏所蔵の写真及び資料より—」 1990年1月
- 飯沢耕太郎「未開の曠野を駆け抜けた孤高の写真師横山松三郎」・桑島洋一「日本写真界の横山松三郎のこと」『芸術新潮』1990年2月
- 千代肇共著「明治期における北海道の博物館(1)」『北海道開拓記念館調査報告』北海道開拓記念館 1990年3月
- 木村克彦「営業写真師の開祖下岡蓮杖小伝」『月刊ウィークス』5月号 第6巻第8号 日本放送協会出版社 平成2年5月 1990年

横山松三郎の年譜

西暦	年号	
1799	寛政11	<ul style="list-style-type: none"> ・江戸幕府箱館以東の東蝦夷地を直轄とする。高田屋嘉兵衛エトロフ航路を開く。 ・高田屋嘉兵衛千島エトロフなど漁場を開発して、弟金兵衛を漁場および箱館支店の総支配人に置く。
		*初代横山文六は津軽下北の人で、高田屋嘉兵衛とエトロフ漁場開発に盡力した。
1802	享和2	<ul style="list-style-type: none"> ・幕府、箱館奉行を置く。高田屋嘉兵衛蝦夷地定雇船頭を命じられ、苗字帯刀を許される。江戸航路も開かれ、箱館は日本海航路と蝦夷地の要港となる。 ・嘉兵衛の代人高田屋金兵衛、湿地5万坪を埋立て、宝来町恵比須町の基礎を築く。
1807	文化4	<ul style="list-style-type: none"> ・幕府、西蝦夷地をも直轄して箱館奉行を松前に移し、松前奉行と改める。松前氏（藩）、陸奥国梁川の官衙および図籍が交付され、移封となる。高田屋は近江商人に代って、蝦夷交易を把握して箱館はその中心地となる。
1821	文政4	<ul style="list-style-type: none"> ・幕府、日露間の危惧が去り、東西蝦夷地を松前藩に戻し、翌年松前奉行を廃止。
1822	文政5	<ul style="list-style-type: none"> 高田屋金兵衛は松前藩御用達を命ぜられ、苗字帯刀を許される。高田屋嘉兵衛は郷里淡路島に隠居して、箱館を高田屋本店、江戸・兵庫・大阪を支店とした。
		*初代文六と松三郎の父も高田屋に仕え、初代文六はエトロフ漁場支配人格であった。
1833	天保4	<ul style="list-style-type: none"> ・高田屋闕所となる。金兵衛は淡路の領主松平阿波守に身元御預となり財産没収となるが、金兵衛所有家屋、倉庫、器材などは親類の意志で処分となった。
1836	天保7	<ul style="list-style-type: none"> *初代文六は、高田屋金兵衛の幽閉と高田屋没落をなげいて、箱館で歿する。 *二代目文六松三郎の父は、松前藩の場所請負人制となったエトロフ漁場で再びつとめて支配人となる。
1838	天保9	*横山松三郎、10月10日エトロフで生れる。幼名松三郎、後に文六を襲名する。
1848	嘉永元	*父文六が歿する。松三郎11才、母ミヤ、姉2人、妹ミヨ、弟松蔵と箱館でくらす。
1852	嘉永5	*松三郎15才。母のすすめで商家某店の奉公人となる。幼少から絵を好み、仕事を終えてから葛飾北斎の画本を模写し続けた。2年にして肺疾となり療養生活をする。
1854	嘉永7 (安政元)	<ul style="list-style-type: none"> ・幕府、日米和親条約を締結し翌年箱館開港とするが、ペリー提督は箱館状況視察を申出て、ペリー艦隊箱館入港。箱館市中騒然として“写真と黒人”に驚く。E・ブラウン・ジュニア、遠藤又左衛門らを撮影する。名主小嶋又次郎「壱墨利加一条写」の当時の記録には役人、女性などが写真に撮されたことや“箱の鏡”（写真鏡）の観察が書かれている。
		*横山松三郎は、このとき初めて写真を知る。
1855	安政2	<ul style="list-style-type: none"> ・箱館に米・英・仏・独国の船が入港し、乗組員が上陸してジンなどをラッパ飲みして街を歩いていた。弘前の平尾魯仙「箱館夷人談」には、箱の鏡について驚き詳細に記録し、写真鏡の寸法まで書いている。松三郎自営の商店を開く。
1856	安政3	<ul style="list-style-type: none"> ・箱館奉行は欧米の学術、航海、砲術、化学、器械などを研究して学ぶため諸術調所を設置して、蘭学者の武田斐三郎を教授役とした。 *松三郎は、この頃“見聞きするところの”写真鏡を試作した。レンズは自分で作り、薬剤の調合で苦心するが、やや映像を写すことに成功した。薬剤調合などで武田斐三郎から指導を受けたと思われる。
1857	安政4	*松三郎は病弱のため商店もままならず、親戚の者が諸国の神社寺院めぐりの旅に出ることになり、病気回復祈願のため奥州津軽から江戸、京阪を経て四国の讃岐神社、木曾から日光、信州善光寺を経て箱館に帰った。20才。
1858	安政5	<ul style="list-style-type: none"> ・ロシア初代領事ゴシケビッチ夫妻、医師アルブレヒト、領事館付司祭など15人が着任して実行寺に止宿する。
1859	安政6	<ul style="list-style-type: none"> ・幕府は箱館・神奈川（横浜）・長崎を自由貿易港と定めて開港した。箱館入港の第一船は、米国艦船モーレー号で、乗組員が上陸して景観などを撮影した。市中再び騒然とするが、この年ロシア軍艦20隻を始め、アメリカ、イギリス艦

- 船が出入港し、箱館商人は直接外国人と取引きが認められるようになった。
- ・イギリス領事ホジソン夫妻が着任して、フランス領事を兼ねた。
- 1860 万延元 * 松三郎は、この頃ゴシケビッチから昆虫の実写による画を依頼され、1ヵ月もかかって完成し、写真の方法を手をもって教えられた。
- ・ロシア病院が領事館の隣に新築した。ロシアの世界的植物学者マキシモビッチが来箱。須川長之助を助手として駒ヶ岳、大野、木古内などの植物などを収集して、翌年には多量の木材標本、鳥類剥製標本を本国に送るが、ゴシケビッチも昆虫標本などを本国に送っている。
- 1861 文久元 * ロシア領事館付司祭ニコライ着任。ニコライがロシアから持参したゴローニン、リコルド著「日本俘虜実記」1816年モスクワ発行に掲載の“高田屋嘉兵衛肖像画写真”を高田屋四代目篤太郎に渡す。
- * 松三郎は、この写真の額を作り、祖先ゆかりの高田屋嘉兵衛の肖像画、印刷、写真技術に感動して、このとき生涯の進むべき道を決めたと思われる。
 - * ロシアの画家レーマンが滞在する。松三郎はレーマンが荷物運搬役の人夫をさがしているのを聞き、ニコライに相談してレーマンの雇人夫となり、山奥などに入って実写する様子を見て、洋画法を学んだ。
- 1862 文久2 * 箱館奉行は、海外貿易を試み幕艦健順丸で香港・バタビア行を計画。
- * 松三郎は写真術研究のため母に健順丸乗船の許しを得て、商品支配掛の箱館商人蛭子耕平に頼み、健順丸商品掛手附横山松三郎となる。健順丸は品川港で物議が起り中止。
- 1863 文久3 * 幕府は改めて10月健順丸の長崎、上海行を命ずる。松三郎は蛭子耕平らと乗船、箱館の海産物見本を積載し、箱館奉行の幕吏、諸術調所の学生など50余人が箱館を出港。品川に寄港して兵庫に碇泊。
- ・この年の5月医師アルプレヒト帰国、医師ゼレンスキーが交代で着任。
- 1864 元治元 * 健順丸2月9日兵庫を出港して、2月21日上海に到着。滞在約1ヵ月半、交易と視察を終えて、4月9日上海を出港して途中長崎、兵庫に寄港し、7月10日無事に品川に帰着した。
- * 松三郎にとっての上海滞在は、各国の商館などがあり、欧米の文化に接して洋画法と写真術、ニューヨーク、パリ、ロンドン流行のステレオ写真やプロマイド写真、接写法などの見聞を広げたとと思われる。
 - * 松三郎は横浜に入港するとすぐに下岡蓮杖をたずねて、ようやく印画法を学ぶ。松三郎はガラス写真に優れていたもので、蓮杖とは写真で深い関わりを持つようになる。横浜から帰り、ほぼ写真の術を知ったのが冬であった。
 - この年、ロシア領事館で新島七五三太(襄)、林儀助と父子が写真を写す。
- 1865 慶応元 * 下岡蓮杖、箱館の横山松三郎を手紙で呼び出して、写真と石版術を教える。松三郎は石版術の研究に取り組んで、その技術を習得した。
- 1866 慶応2 * 松三郎は印画法を木津幸吉と田本研造に教える。箱館では江戸での写真場開場の準備をし、「新造双眼目鏡」など研究し器具を作製した。
- 1868 慶応4 (明治元) * 松三郎、江戸の両国元坊で写真場を開業するが、まもなく上野池之端仲町7番地に移り、写真場を通天樓と呼んだ。
- * 箱館戦争の勃発を聞いた松三郎は母を安じてすぐに箱館に帰るが、弟子達はそれを知らず松三郎のことを心配して驚かせた。
- 1869 明治2 * 箱館戦争が終わり、蝦夷地を北海道、箱館を函館と改め、開拓使が置かれる。
- * 松三郎は、東京へ帰る途中弘前の医師佐々木元俊を訪ねて、箱館港内の写真を披露している。弟松蔵は、兄の通天樓写真場で手伝いをしながら写真術を学ぶ。
 - ・箱館戦争後の写真を弟松蔵、田本研造、ロシア人が撮影したといわれる。
 - ・箱館の木津幸吉は、元箱館府知事清水谷公考について上京した。
 - ・田本研造は、木津幸吉の写真機械一式を譲り受けて、函館会所町に写真場を開く。
 - * 横山松三郎、門弟と人夫10人で日光全山の撮影を行い、深山の瀧など景勝地を写真で紹介するが、ステレオ写真でも日光全山の瀧や景勝地を写す。

日光の写真は、下岡蓮杖と松三郎によるもので、徳川家に献上したといわれる。

この頃、新発見といわれた人力車をステレオ写真で撮影している。

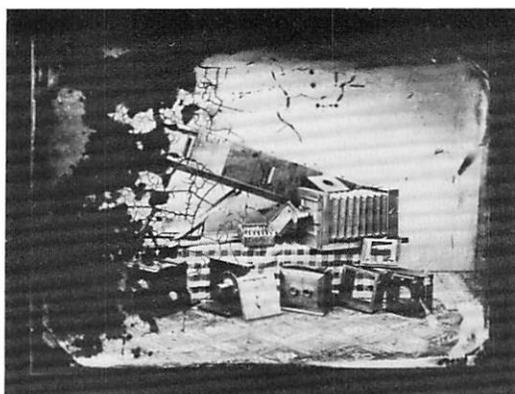
- 1871 明治4 * 蛭川少史の依頼で、内田九一と旧江戸城の写真撮影をする。しかし、旧江戸城の荒廃した写真は、ガラス原板を蛭川が所有して公開されなかった。このときの高橋由一が彩色した写真が『旧江戸城写真帳』として東京国立博物館に所蔵されている。
- 1872 明治5 * 太政官布告「古器旧物保存の御布告」、壬申検査が実施になる。
* 蛭川式胤（少史）は壬申検査の建物や宝物写真撮影に写真師横山松三郎を起用し、正倉院開封と宝物の写真、伊勢神宮、京都御所、奈良三月堂、八幡宮、東大寺など、当時蛭川式胤としか撮影できない建物や宝物を写し、『壬申検査寺宝物図集』を残した。
* 蛭川は、文部省博物館、オーストリアのウィーン万国博覧会事務局とも関係し、この写真を万国博覧会にも出品した。万国博覧会出品のため油画家高橋由一に京都、奈良の油彩画を描かせたが、松三郎の「彩色写真 アイヌ一家」は、この年に函館近郊のアイヌ部落で撮影したもので、何枚かが万国博覧会に出品されたと考えられる。
- 1873 明治6 * 横山松三郎、上野池之端通天樓の離れ茶室風の建物で洋画塾を開く。亀井至一、亀井竹次郎、山田成章、村井熊之輔、本田忠保らが洋画を学んだ。
・この年、高橋由一も日本橋浜町一丁目に画学場を新築して、天絵樓と呼んだ。洋風画学校の始めであるが、翌年国沢新九郎がロンドンで西洋画法を学んで帰国し、麹町に彰技塾を開いた。洋画は五姓田芳柳、イタリア人のエドアルド・ド・キヨソネ、アントニオ・フォンタネージの来日で、明治の洋画が根づいていった。
- 1876 明治9 * 横山松三郎は陸軍士官学校教官として招かれる。士官学校にはフランスの画家・建築家のアベル・ゲリノーが御雇外人教師としていたが、精密な地図、器物の画法だけでなく、写真、石版術の教育も必要であった。松三郎は士官学校に在職中写真術研究についやした。
- 1877 明治10 * 松三郎は、ゲリノーの指導で“墨写真術”カーボン写真を実験のすえ、ようやく完成「不朽無變色重寶墨寫真術傳方率」を著す。この墨写真とは、印画紙から作るもので中島待乳も松三郎から手解きを受けて明治14年の内国博覧会に出品している。
- 1878 明治11 * 士官学校で軽気球浮揚実験のとき、松三郎は気球に乗って撮影を試みた。これは、日本で最初の空中写真試験であった。
- 1881 明治14 * 写真油絵の研究を始める。渡米して帰国した鈴木真一が研究していたが、解明できず横山松三郎に相談して翌年2月に松三郎が完成した。助手の小豆澤亮一は、この技術をもって、明治17年に京橋三十間堀に開業した。
* 松三郎、病気のため陸軍士官学校を辞職するが、士官学校時代、新製種板、電気写真、ゴム印画、カーボン写真といった新しい写真実験を行っている。
* 松三郎は市ヶ谷八幡社内に隠居するが、通天樓は弟子にまかせ、写真転写による石版印刷が本格化して、京橋に写真石版社を設けた。
- 1882 明治15 * 3月、函館に帰って函館新聞社主伊藤鑄之助に写真油絵をみせた。松三郎が鑄之助を写したもので、同じ鑄之助肖像写真を鈴木真一が写真油絵にしたものと2枚が市立函館図書館にある。
* 松三郎は、洋画塾、通天樓の天才的門弟であった亀井竹次郎の遺作35点と自作油画3点額入を8月に函館県博物場に寄贈している。
* 市ヶ谷八幡社に隠居した松三郎は、草木盆栽を好み、ろう細工や琴を弾いて楽しんで過し、人と交遊することをさけた。
- 1884 明治17 * 嗣子慶次郎を呼んで、写真器械などを記帳した簿書を渡して老いた母親を見舞いに函館に帰郷する。その母も9月1日に世を去るが、市ヶ谷の草屋に門弟達を呼び死期を告げ、死の前夜は家族と談笑し、身の汚れをみとどけてから深い眠りに入った。明治17年10月15日の朝、47才の生涯を終った。
・函館の写真師、油画家といわれた横山松三郎は、幕末の箱館で最初に洋画法と写真術を習得して、東京で第一人者として活躍し、病にいたるまで研究を続けた芸術家で、初めて写真術に洋画法を取り入れた人であった。

図版説明

1. 横山松三郎自画像 油彩 和紙。明治6年に洋画塾を開くが、明治2・3年の頃に天才画家と属望された亀井竹次郎が洋画を学んでいることから、明治2年頃の作品と思われる。洋画の作品は「菊」など現存のものが少ない。高田嘉七氏所蔵。
写真場と写真器具。写真器具AとBは、カメラレンズ・敷物の類似と違いから両国と池ノ端の写真場の違いとみることもできよう。写場内の小卓子などが“写場の弟松蔵”、“鏡に写つす2人の娘”など写場の写真にみえる。横長連結木箱と台は接写装置と考えた。
2. 小卓子のステレオスコープと自作の新造双眼目鏡、立体写真鏡、ガラス立体写真1組
3. 横山松三郎の作品。1861（文久元）年司祭ニコライ持参の写真と横山松三郎製作の額縁。写真は、1816年モスクワ出版『グローニン日本俘虜実記・リコルドのグローニン救出記』文中“高田屋嘉兵衛肖像画と松前奉行がグローニンに贈ったロシア語”の写真印刷の接写写真である。
ガラス原板は、左上に十二支（年代）と整理番号を記入しているのがある。
図版に掲載の横山松三郎写真は、なるべく原板密着に掲載することにした。
4. ニューヨーク、ブロードウェイなどのプロマイド写真で、集合写真、プロマイド接写写真、ガラス原板、背を向けた“写場の松蔵”、“本を読む中島待乳”、“小卓子に本を置いた人物”などのポーズ、楕円形浮出、肖像写真の下部ボカシ写真などはプロマイド参考と思われる。
5. 台紙貼立体写真（明治2年～明治5年）。ガラス立体写真（明治2年頃）。ガラス原板。“変化朝顔”の接写は、蔓・蕾・葉にある細毛まで鮮明に写し出している。
6. 明治天皇、皇后陛下御真影は、画工兼発行人が横山松三郎門弟亀井至一で、刷工番山秀吉とある。至誠堂謹製とあるが、写真でなく優れた実写法による絵で、明治天皇の絵はキヨソネ、五姓田芳柳、写真は内田久一が許可されているが、この絵は明治3年から6年頃に亀井至一が描いたものと思われる。許可申請をしているが、顎髭を剃っていない肖像画は珍しく発行にならなかったかも知れない。
函館新聞社主伊藤鑄之助肖像写真油絵。創始者横山松三郎と鈴木真一の作品は、伊藤鑄之助が函館新聞に掲載した記事から明治15年3月と考えるべきであろう。市立函館図書館蔵。
『横山松三郎傳記』『横山先生履歴』。市立函館図書館蔵。
『不朽無變色重寶墨寫真術傳方率』、この原本は高田嘉七氏所蔵。1978（昭和53）年春に市立函館博物館で「北前船と高田屋」を開催のとき、一般に公開したものである。



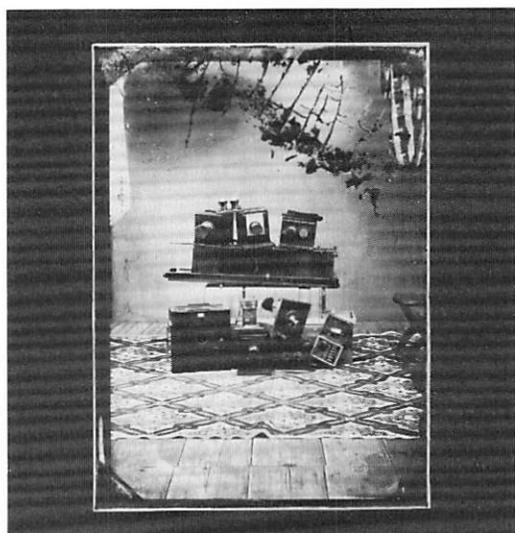
横山松三郎自画像 油彩 和紙



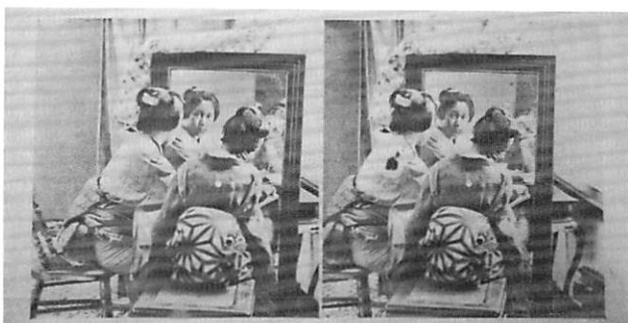
写真器具A



写場の弟松蔵



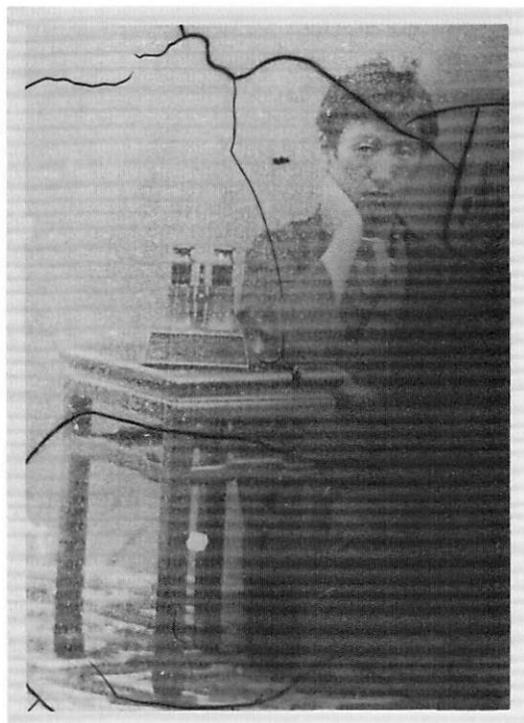
写真器具B



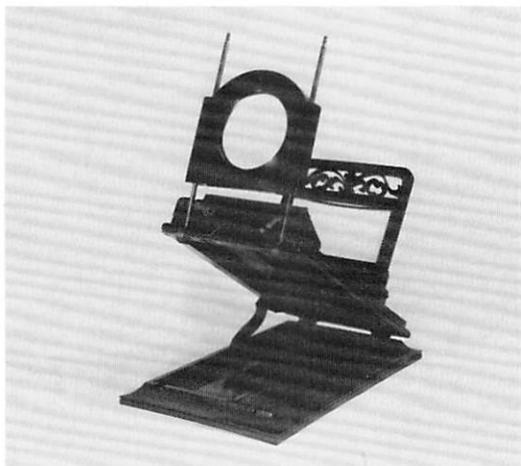
鏡に写つす2人の娘



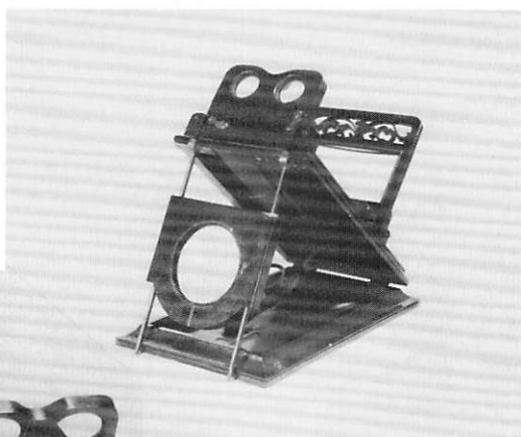
写場の小桌子・洋人形・洋椅子



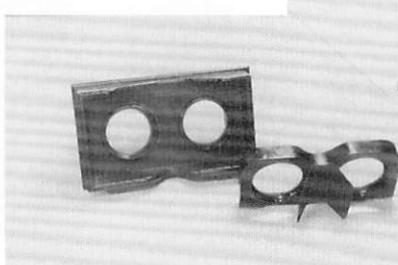
ステレオスコープと松蔵



新造双眼目鏡その1



新造双眼目鏡その2



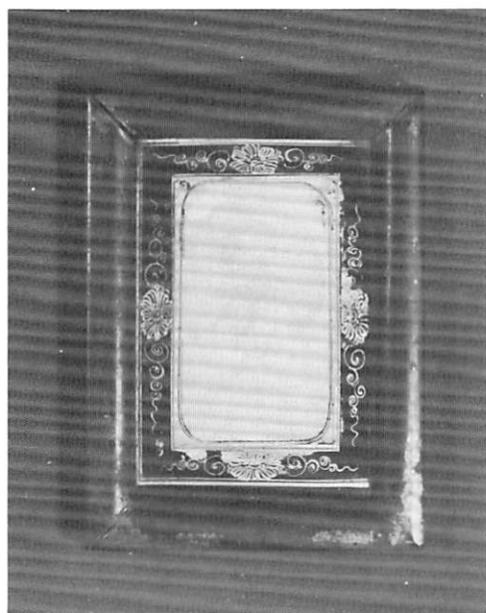
替玉と立体写真鏡の双眼レンズ



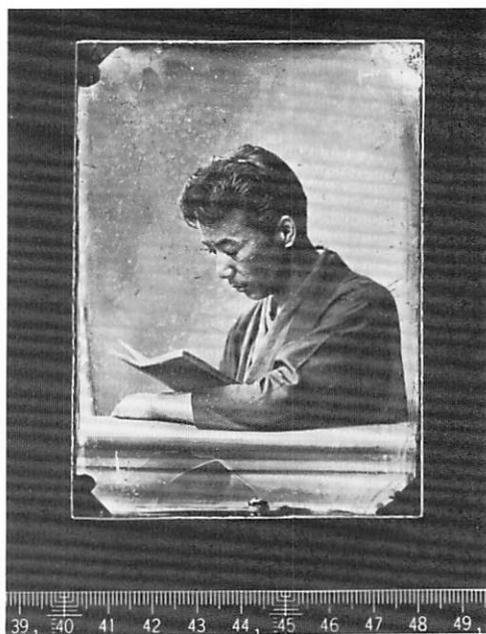
ガラス立体写真



立体写真鏡



横山松三郎制作の写真額縁



門弟中島待乳(精一)



ガラス写真原板と整理木箱



武士と桌上的サボテン



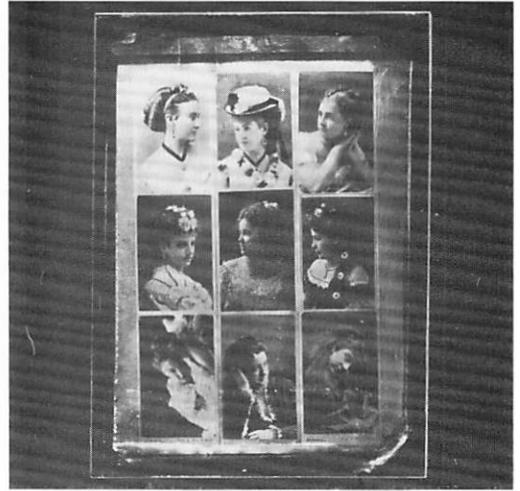
ガラス写真の整理番号



野外の宴会



集合写真A



集合写真B



集合写真Aの部分拡大



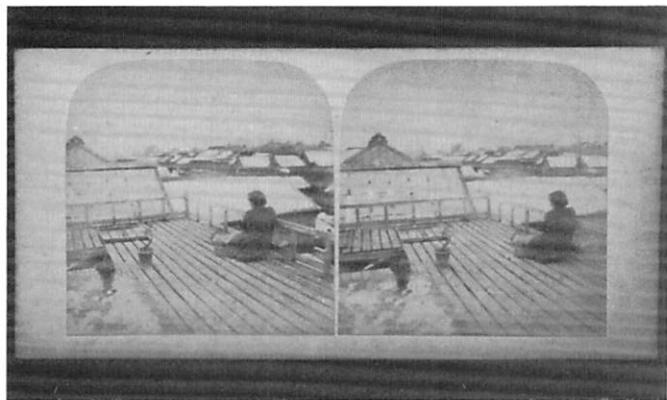
小卓子に本を置いた人物



集合写真の部分拡大



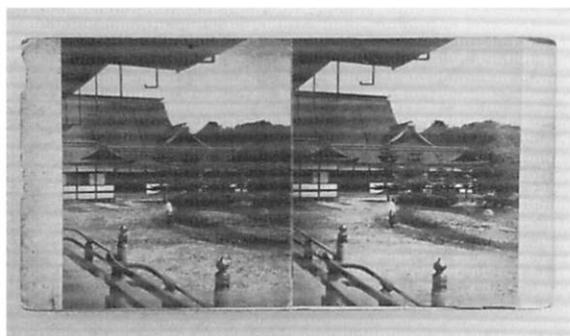
プロマイド写真の拡大



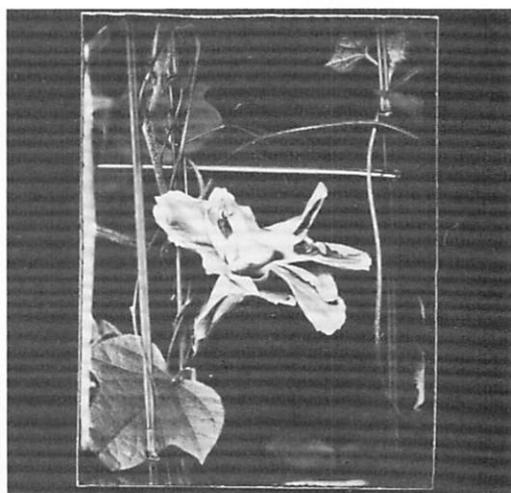
通天楼の楼上。左写場と積雪の池之端



洋装のある人物



御常御殿



変化朝顔



日光龍頭滝



人力車



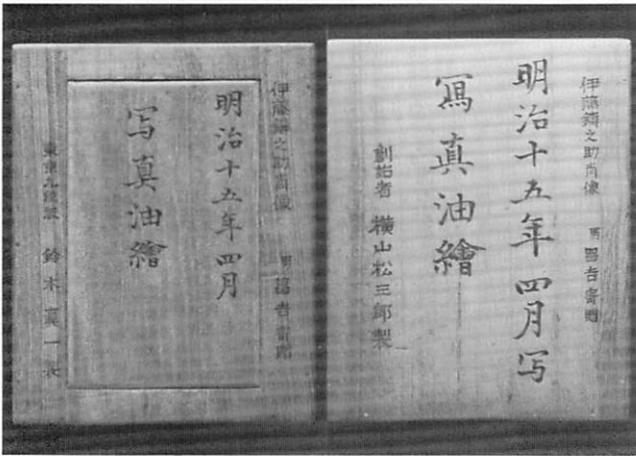
懐中時計を持つ女仕事師



写真油絵。右横山松三郎作品



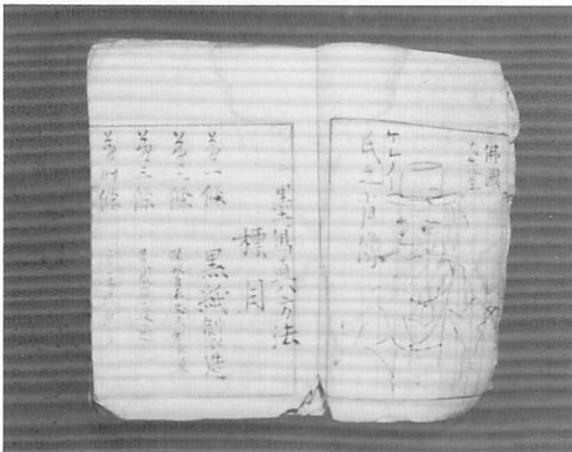
“眼力人” 下縁にガラス切痕がある



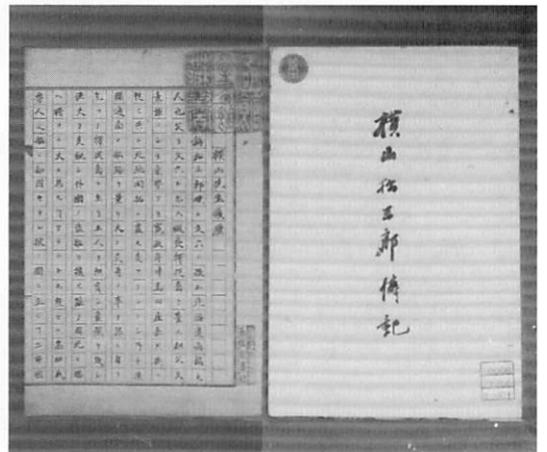
市立函館図書館蔵の写真油絵箱書



明治天皇・皇后御真影制作の写真



「不朽無變色重寶墨寫真術傳方率」



「横山先生履歴」

五稜郭出土の肥前系陶磁器

田原良信

はじめに

特別史跡五稜郭跡は、幕末の箱館開港により蝦夷地直轄の目的で再設置された箱館奉行に伴い、防備上の問題から奉行所の移転が必要となったために、洋式築城法によって築造されたもので、明治維新の際には箱館戦争の舞台ともなった所である。築造工事は、安政4年(1857)に着工し、元治元年(1864)に竣工して奉行所が移転開設することとなり、慶応4年(1868)に明治政府へ引き継がれた後も、箱館裁判所・箱館府となるなど蝦夷地の政治の中心地としての役割を担っていた。明治4年(1871)に奉行所庁舎を始めとする郭内の建物の大半が解体された後は、大正3年(1914)に公園として開放されたが、現在までに堀と土塁および松の木が残存する程度で、郭内は未整備の状態であった。このために、昭和60年度から平成元年度にかけて、史跡整備に伴う郭内建物に関する遺構確認発掘調査が実施された。調査の結果、郭内各所からは箱館奉行所に関する建物遺構などが検出され、これに伴う屋根瓦片や陶磁器類を始めとする生活用具が大量に出土した。このうち陶磁器類は、肥前系・瀬戸美濃系・関西系が主産地とみられ、数量的にも多くまた内容も豊富なものがある。郭内の数箇所で見出された塵捨場跡などからまとまって出土するのは、瀬戸美濃系や関西系の雑器が主であるが、奉行所奥向の奉行役宅部分や家臣関係の長屋跡付近には、やや上手とみられる肥前系の陶磁器がある程度まとまって分布する傾向にあった。この肥前系陶磁器は、数量的に多くはないが、瀬戸美濃系や関西系などに比べて特徴的なものがあり、また内容的にも変化に富むものであった。そこで、ここでは出土した肥前系陶磁器の概要を紹介するとともに、周辺の遺跡との関連など幕末期の流通の一端について探ることにしたい。

肥前系陶磁器の内容

出土した肥前系陶磁器は、各種の製品を合わせてほぼ個体となるとみられるものが、約160個体であり、小破片を含めると約16,000点程である。器種としては、碗類、鉢類、皿類、段重、蓋物、徳利、火入、コンプラ瓶などがあり、そのほとんどが磁器製のものである。時期的には、それぞれの製品の中には、伝世品や明治・大正期とみられるものも含ま

れているために多少の違いはあるが、大半のものは幕末期に相当すると推定される。特に五稜郭内の奉行所庁舎などの建築工事が開始された文久元年（1861）頃から、明治政府へ引き継がれた慶応4年（1868）に至るまでの箱館奉行所時代に利用されたものがほとんどであると思われる。ただ、明治元年（1868）から2年（1869）にかけての箱館裁判所・箱館府時代や箱館戦争時に該当するものも否定できないが、それほど大量には存在しないとみられる。なお、製品の中には焼成窯がおおよそ推定されるものもあるが、多くのは肥前系に属するという程度で、産地を細分化することは困難である。以下に、幕末期とみられる器種について、それぞれの特徴を記載したい。

碗 類

器形：飯茶碗、湯呑碗、盃などに相当するものがあり、ほとんどが磁器製の染付で、陶器はごく僅かである。器形としては、丸形（丸腰形）、天目・広東形、端反形、腰突形、筒形などがあり、丸形と端反形が主体となっている。飯茶碗と思われるものは、蓋付きのものが多くみられ、それぞれ碗の形に準じた器形の蓋が組合せとなるようである。大きさとしては、飯茶碗・湯呑碗が、口径10～11cm、高台径3.5～4.5cm、高さ5～6cm程度のものが多く、盃が口径6～7cm、高台径3cm、高さ4～5cm程である。

釉薬：透明釉が主であり、やや青味がかかったものもみられる。高台畳付を除き、器内面と器外面のほぼ全面にわたって施釉されるものが大半である。

成形技法：ほとんどのものがロクロ成形と思われ、薄手に作られるものが多い。また、高台の縁をシャープに削り取る例も多くみられる。

文様構成：ほとんどが手描きの染付となり、印刷手法はみられない。器外面の文様としては、全面にわたって密に描かれるものが多く、唐草・唐花文や松竹梅を基調とした文様などが主であり、蛸唐草文や網目格子文も比較的よくみられる。器内面の見込の文様としては、簡略化した松竹梅文が多く描かれ、中には唐草を基調とした文様や「永楽年制」などの年号銘を描くものもある。口縁内側の縁絵としては、雷文や菱形・割菱形文を巡らすものが多く、他には卍つなぎ文や数本の平行線文が描かれるものもある。また、高台に櫛高台と呼ばれる文様が描かれるものも比較的多くみられる。

高台内銘款：中国磁器の影響を受けた「裏銘」「底裏銘」で、年号や吉祥文字を染付するものが多い。比較的多くみられるのが、清朝年号の「乾隆」の「乾」字の篆書体で、他には「大明成」などの年号や、意味不明の変形合字などがある。

鉢 類

器形：六角形や八角形など多角形で、ほとんどのものの口縁部が大きく端反りとなる磁

器製深鉢である。腰突形で、口縁が緩やかな波状となり、大きさは様々であり、口径17～23cm、高台径8.5～10cm、高さ7～8cm程度で検出例は少ない。

釉薬：透明釉や緑釉ががるものがほとんどで、高台内を除き器内外面の全面にわたって施釉されている。

成形技法：ほとんどが型抜きで幾分揚げ底に作られているもので、高台内の中央部を円く削って、その周辺を釉を剥いだ「蛇ノ目凹形高台」が多くみられる。窯詰め時には、おそらく高台内の釉剥ぎ部分に、窯道具のチャツを当てて焼成したと思われる。

文様構成：器外面では、波・鳥文など山水風の簡素なものが多く、器内面と見込には唐草・葡萄・鳥・亀・蝶・波・雲・松竹梅などを基本とする文様となっている。特に、器内面には幾つかに分割し、対をなす文様構成となるものも多く、口縁内部の縁絵には雷文など連続する文様も描かれている。また、高台外面には櫛高台様の文様や平行線文などが多く描かれるようである。

皿類

器形：大皿、中皿、小皿があり、丸皿、角皿、多角皿などの種類がある。大・中・小皿ともに丸皿が多く、角皿や多角皿は僅かである。丸皿では輪花形となり、器壁を幾分内抱えに立ち上がる碗形状のものも多く、口縁が外反する端反りのものは僅かである。また、角皿の場合には、腰折れ状のものもみられる。口径に占めている高台径の割合では、およそ1/2～1/1.5位の比較的大きなものが多く存在する。

成形技法：丸皿の輪花形、角皿、多角皿のほとんどが型打ち成形やロクロと型打ち成形の併用によるもので、ロクロ成形のみものは少ない。中皿の輪花形ものは、ほとんどが「蛇ノ目凹形高台」であり、高台内を除き高台畳付まで施釉されている。この他の大半が高台畳付を削り出して、畳付を除き施釉されている。また、中には高台畳付を幅広く削り出して、蛇ノ目状に作るものや、見込部分を蛇ノ目状に釉剥ぎしたものもみられる。焼成の段階では、「蛇ノ目凹形高台」にはチャツ、その他には主に足付ハマなどが用いられるようであり、見込に数箇所の足付ハマ痕が残るものも少なくない。なお、見込を釉剥ぎしたものは、砂目を置いて積み重ねをしたものとみられる。

文様構成：内面の主文様は、変化に富み多様であり、口縁部周辺と見込に文様を分割するものと、全体を一文様で描くものがみられる。見込に用いられるものでは、松竹梅文、草花文、花唐草文、山水文、唐人文などがあり、周辺部には、唐草文、松竹梅文、蛸唐草文、山水文、雷文が染付されるものが多い。外側の裏文様では、唐草文を主体としたものが多く、他には松竹梅文などであるが、中皿・小皿には文様が施されないものもある。

高台内銘款：高台内に字銘が入るものは、いずれも中国の年号に因んだものや、吉祥文字および意味不明の変形合字などである。ほとんどが染付けによるものであるが、中には釘書きと思われるものもみられる。年号銘では、「萬曆年製」「大明成化年製」「乾隆の乾」「玩」などがあり、製造元を示した「蔵春亭三保造」銘が染付されるものもある。

段重・蓋物

器形：段重では、器が筒形で、蓋が鈕付きの山蓋となるものが大半である。組合わせが完全となるものはないが、ほぼ3段程度の重ねとなるようである。中段の器には低い高台が付けられるが、最下段ではやや揚げ底となるものの、高台は付けられないようである。蓋物は、器が丸形の碗状で、蓋が鈕付きの平蓋となるものである。1段のみであり、段重とはならない。

釉薬：透明釉が多いが、中には灰釉がかかったものもみられる。段重では蓋との合わせ部や重ね部には釉がかけられないが、他の器内外面には施釉されている。また、蓋物でも蓋と碗形の合わせ部と高台畳付を除いて、器内外面にわたって施釉されている。

文様構成：段重・蓋物ともに、文様が染付されるのは器外面のみであり、器内面・見込は無文である。文様には、蛸唐草文、松竹梅文、吉祥文字文、連子格子文・七宝文、花唐草文、工字文などあり、多種多様である。また、蓋物の高台内に家号や地名と思われる朱書文字がみられるものもある。

徳利・火入

器形：徳利の内、通い徳利のほとんどが関西系のために、肥前系のものの大半は1合程度が入る爛徳利である。火入は、ほとんどが円筒形となり、低い高台が付くものと多少揚げ底となるものがある。口唇部はやや内湾気味に直立し、肥厚するものが多い。

釉薬：徳利は、内面と底部を除き、主に透明釉がかけられる。火入は、口唇部と器外面に施釉されるが、内面および畳付・底部は露胎するものが多い。主に、透明釉か白濁釉または灰釉などがかけられる。

文様構成：徳利は、梅花文や瓔珞文などが染付される。火入では、器外面の全周にわたって唐草文、草花文、動物文などが染付され、口唇上部にも文様が施されるものもある。

コンプラ瓶

主にヨーロッパへの輸出用に製作され、国内の消費地にはあまり供給されていない磁器瓶であり、ほとんどが波佐見産のものである。胴部上面にオランダ語で呉須書きされた、醤油や酒用のための容器で、別名「蘭瓶」と呼ばれ、主に幕末頃から明治にかけて長崎出島から輸出されていたようである。高さ約20cm程の爛徳利に類似した器で、容積は0.5リッ

トル位とみられる。

器形：呉須書きされる胴部上面周辺がやや膨らみを持つ丸瓶で、肩部分から口縁部にかけて山形状となり、胴部がほぼ筒形となるものや胴部から底部にかけてすぼまるものがある。口縁部は玉縁状の凸帯が付けられていて、この凸帯が2段のものと下段が省略されているものがある。底部の角は斜めに削られ、ほとんどのものが揚げ底となっている。

釉薬：器内面と畳付部分は無釉で、器外面には白濁釉・灰釉・緑釉などがかけられる。
呉須書き：胴部の上面にオランダ語とみられるアルファベット文字が書かれていて、2種類のものがある。「JAPANSCHZOYA」（日本の醤油の意）、「JAPANSCHZAKY」（日本の酒の意）と書かれるものであり、中には「1STE. SOORT JAPANSCHZOYA」（日本第1級の醤油の意）と記されるものや分銅印「匚」が描かれるものもある。また、底部に窯印とみられる屋号が記されている例もある。

以上の他には、散り蓮華や御神酒徳利の一部に肥前系のものがみられるが、大量に出土した瀬戸美濃系の湯呑碗や関西系の土瓶といった日常雑器類に該当するものはほとんどみられない。また、灯明皿や鍋などの火を使用するものや、壺・甕などの類にも肥前系とみられるものは存在しない。奉行所で使用される日常的なものの大半は、瀬戸美濃系や関西系の製品であり、肥前系の製品が使用されるのは、ほぼ奥向きの奉行およびその周辺の人々に限られていたとみられ、肥前系陶磁器はやや高級なものとして存在したようである。

焼継技法について

出土した陶磁器の整理中に、すでに接着した痕跡を持つものがいくつかみられ、これが壊れた器を焼継により補修したものであることが判明した。焼継の技法は、白玉と呼ばれる鉛ガラス（フリット）を用いて、低火度で焼いて接着させる補修の方法で、寛政年間頃から江戸などの消費地で商売として流行していたものである。五稜郭出土のもので焼継の痕跡がみられるのは、ほとんどが肥前系の碗や鉢類であり、瀬戸美濃系や関西系では僅かに1点であった。この焼継をした製品の中で、高台の中に朱書きの文字があるものがいくつか認められ、これが焼継師のマークか注文主の名であったと思われる。屋号が多く書かれるようであるが、中には町名とみられるものもあり、蓋物の碗を補修したものには「中新町〇メ□印」と読めるものが存在していた。これは、幕末蝦夷地の焼継師の存在を示すものとみられるが、幕末の箱館には「中新町」に該当する町名はなく、また焼継師に関する記録についても見当たらない。しかし、江差町には江戸時代中頃から「中新町」に該当する諸職人在住の町名があり、明治2年の記録には瀬戸焼継師が存在していたことが記さ

れている。このことから、おそらくは江差の焼継師が箱館へ行商に行った際に補修したものとみられる。いずれにしても、当時の補修価格は一体いくら位であったのかは不明であるが、少なくとも補修してまで使用するものが多い肥前系の陶磁器は、やはり瀬戸美濃系や関西系のものに比べて高級かつ高価であったとみることが出来よう。

幕末期肥前系陶磁器の分布について

南北海道における幕末期頃の陶磁器類は、主に弁財船等によって大量に運び込まれて、消費されていたものであり、その多くは大阪を中心とした関西方面からの出荷によるものとみられる。現に、いわゆる北前船ルートによってもたらされたと思われる陶磁器類は、松前・上ノ国・江差の各町内に数多く残り、古くは16世紀頃から明治期に至るまでの肥前を中心とした各地のものが豊富にみられる。出土品では、松前町福山城跡や上ノ国町漁港遺跡などからは、その遺跡の時代幅が広いことを示すように16世紀頃からの製品があり、江差町開陽丸遺跡では幕末最終期から明治初頭に限定される製品がみられる。また、箱館近郊の松前藩陣屋である上磯町戸切地陣屋跡からは、幕末期の陶磁器類が数多く出土し、箱館戦争の戦場であった厚沢部町館城跡からも、幕末最終期から明治初頭の陶磁器類が少量確認されている。このいずれの遺跡からも、五稜郭の出土品と同様な1860年代頃とみられるものがあり、特に瀬戸美濃系や関西系のものは器種などもほとんど同一である。また肥前系も類似するものが多く、ほとんど同じようなルートから搬入されたものとみられるが、箱館における肥前系陶磁器については、瀬戸美濃系や関西系とは別にもたらされたようである。それは、万延元年(1860)に佐賀藩から藩士の武富平作が派遣されて、肥前陶磁器の販売を行ったとの記録があり、ここを經由して消費されたこととみられることである。明治4年(1871)の御用留には明治政府関係に納品してした記録もあり、幕末期当時から主にこの陶磁器販売店から五稜郭の奉行所などに持ち込まれたとみるべきであろう。ただ一般的な碗類や皿類などは、ナラ茶と書かれる蓋付の茶漬碗や大・中・小皿、尺皿のように記録にも止まっているが、対ヨーロッパ貿易に関係するコンプラ瓶は入っていない。一応、佐賀藩関係からはコンプラ瓶を持ち込んだ可能性もあるが、それを立証することはできない。長崎出島からヨーロッパへ直接輸出される以外に国内にはほとんど出回らないはずのものであるが、ここ北海道の五稜郭跡からはまとまった量の出土があり、周辺でも戸切地陣屋跡、矢不來天満宮跡、福山城跡、開陽丸遺跡から少量出土していることは、当時の蝦夷地へは相当量持ち込まれていることを裏付けるものである。ただ、その目的は何で消費させる相手はどこか、などは明らかでないが、ここで「蔵春亭三保造」銘入り陶磁器

販売元である久富家が関係してくる可能性が出てきた。それは、「蔵春亭三保造」銘入りの高級磁器が主にヨーロッパ向けに製作されたもので、肥前産の輸出用品という点でコンプラ瓶との共通性がみられることによるためである。久富家と蝦夷地の関わりについては「蔵春亭三保」を名乗った久富與次兵衛昌常から家督を受け継いだ、末弟久富與平昌起が北海道と千島の間で交易を開拓しており、明治3年（1870）千島沖で難破した後、翌4年6月に釧路国厚岸海岸で死亡したため、函館の地藏堂に葬ったという記録がある。函館ではどのようにして交易・商売をしていたか明らかではないが、かつては長崎で和蘭貿易を行っていたことから、やはり函館においても対外貿易に関わりを持っていた可能性は高いものがある。しかしながら、現在までのところその証拠となるものは発見されていないために、あるいは他の製品と同様に武富平作の販売ルートによるものであることも考えられる。いずれにしても、ヨーロッパ以外にもロシアなどとも交易の足掛かりがあった可能性もあるが、今のところ特に記録上に記されたものはみられない。

以上のように、五稜郭出土の陶磁器類はおよそ幕末最終段階から明治初頭の1860年代に限定しても支障ないように思われ、中でも対ヨーロッパ向けの製品も少なくなく、貿易港としての箱館を物語っているようである。明治以降の函館は、大火の繰り返しがあるなどそれほど多くの製品は残されていないが、幸いに周辺町村にはまとまった資料が割合に豊富であり、今後はこれらとの比較検討を詳細に行い、幕末の生活や流通について明らかにしていきたい。

（市立函館博物館学芸員）

〔引用・参考文献〕

- 『明治四年ヨリ諸用留』 武富平作 市立函館図書館蔵
- 『肥前陶磁史考』 中島浩気 1936
- 『江差町史』 江差町
- 『函館市史一通説編第一巻』 函館市 1980
- 『史跡松前藩戸切地陣屋跡一昭和56～60年度発掘調査概要報告』 上磯町教育委員会 1981
- 『史跡福山城(2)～(8)』 松前町教育委員会 1984～1990
- 『海を渡った日本のやきもの』 日本観光文化研究所編 ぎょうせい 1985
- 『国指定史跡出島和蘭商館跡範囲確認調査報告書』 長崎市教育委員会 1986
- 『上ノ国漁港遺跡一昭和58・60年度発掘調査報告書』 上ノ国町教育委員会 1987
- 『長崎の青貝細工と有田磁器』 岡泰正 『神戸市立博物館だよりNo.25』 1988
- 『肥前陶磁』 大橋康二 考古学ライブラリー55 ニューサイエンス社 1989
- 『特別史跡五稜郭跡一箱館奉行所跡発掘調査報告書』 函館市教育委員会 1990



広東形碗-蘭人・雪持ち笹竹文



蓋付き端反形碗-花唐草文



腰突の端反形碗-花唐草文



腰突の端反形碗-唐風景文



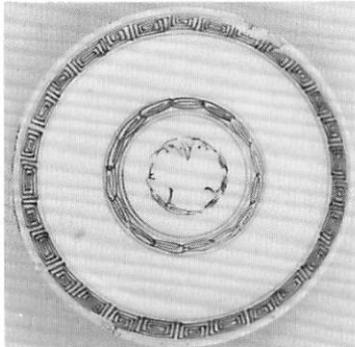
筒形碗-花唐草・龍文



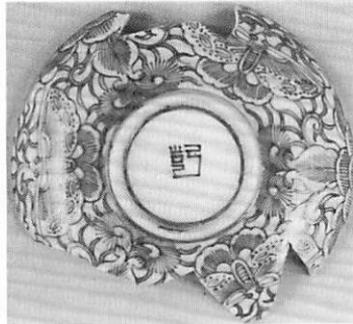
盃-竹文・四ツ割菱形文



印判文がある盃-有田窯?



蓋内面の松竹梅簡略文



高台内に「乾」が入る蓋



高台内の年号銘-大明成



八角形鉢（鳥・亀・花文—口径23cm）



八角形鉢（葡萄・蝶・唐草文—口径17cm）



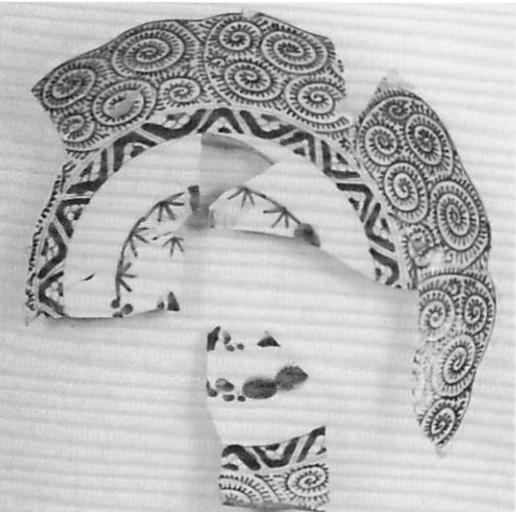
輪花形大皿（19世紀前半—伝世品）



型打ち長方形皿（草花文）



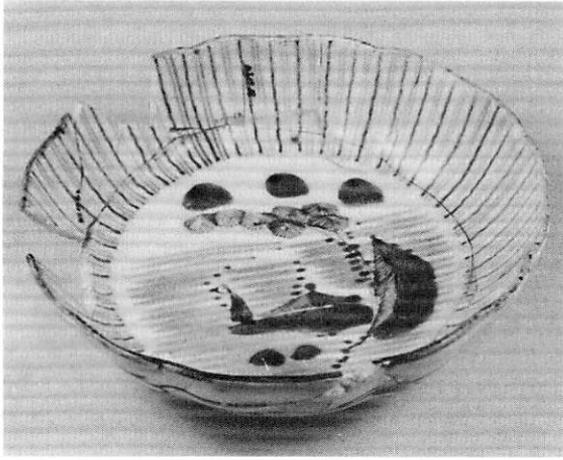
角皿（竹・梅・桃文）



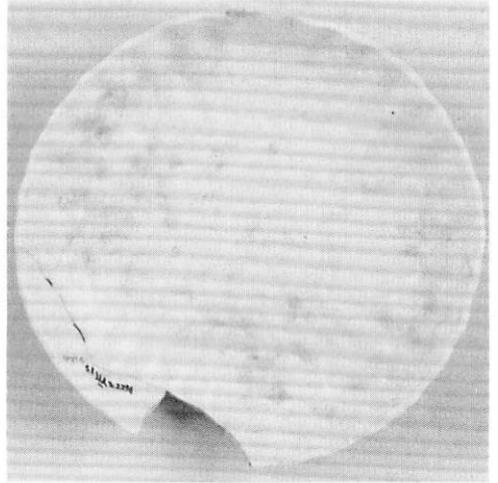
輪花形大皿（蛸唐草・松竹梅文）



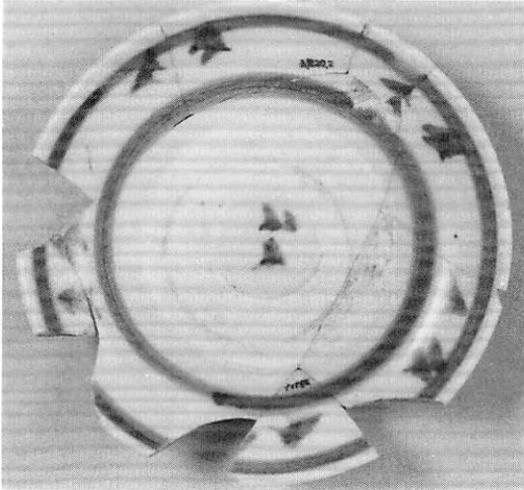
型打ち中皿—見込に松竹梅の簡略文



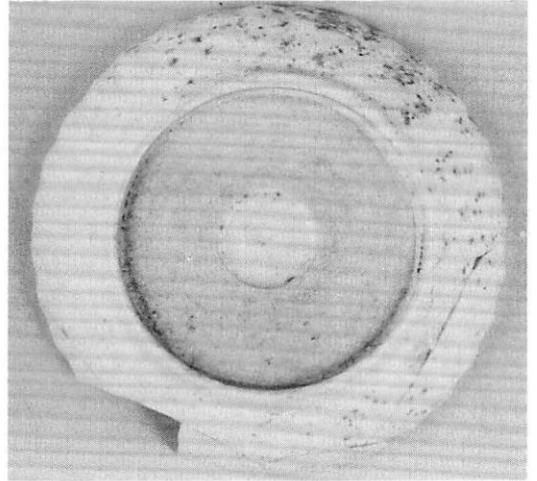
型打ち中皿



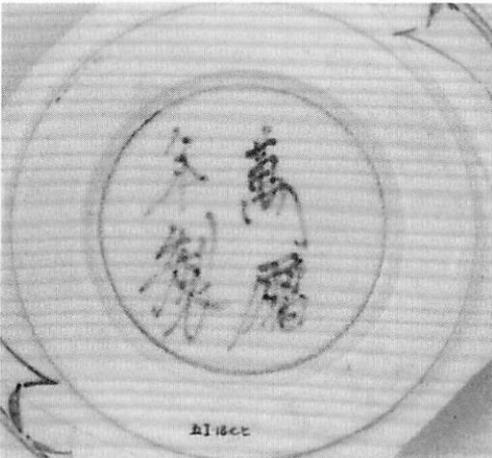
型打ち中皿—見込に足付きハマ痕



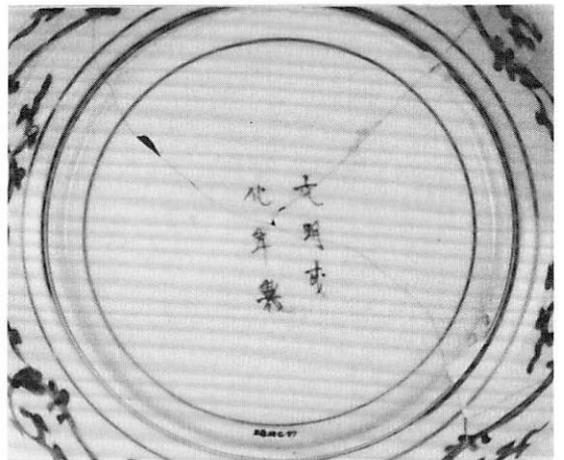
見込釉剥ぎの小皿



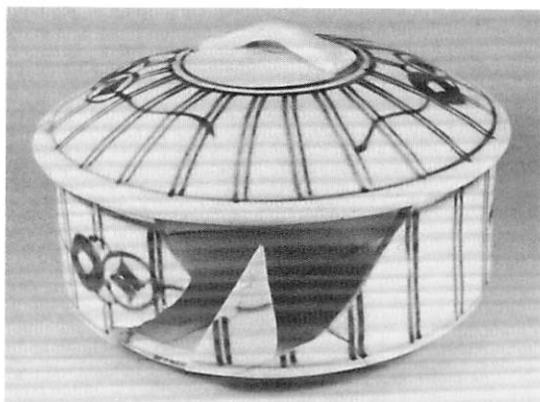
蛇ノ目凹形高台の型打ち中皿



裏銘「萬曆年製」蛇ノ目状高台置付



裏銘「大明成化年製」



段重（七宝文－3段重？）



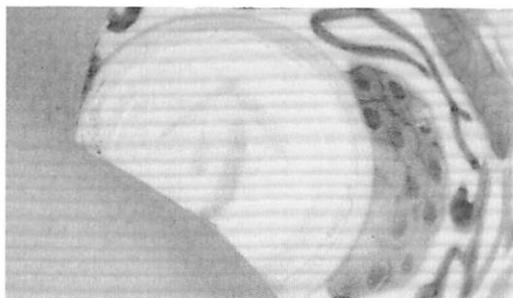
蓋物（鈕付き蓋と碗－合わせ部分は無釉）



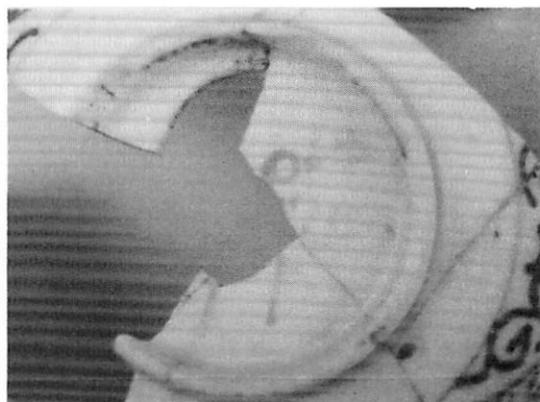
円筒形火入（菊花文・唐花文）



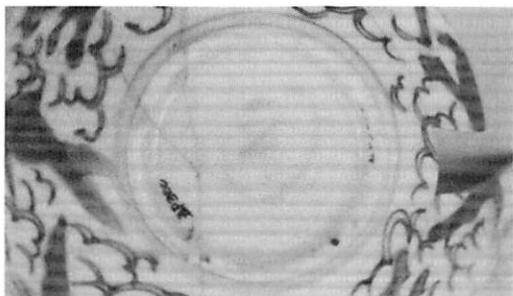
円筒形火入〔手焙?〕（花唐草文）



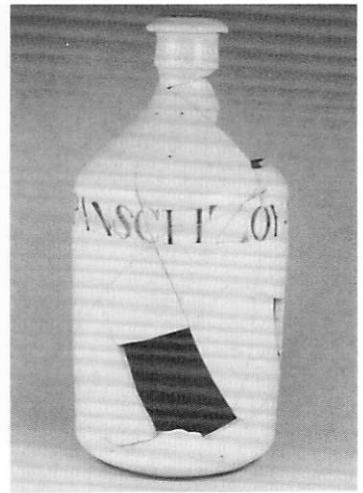
高台内の朱書き－焼継師の印?



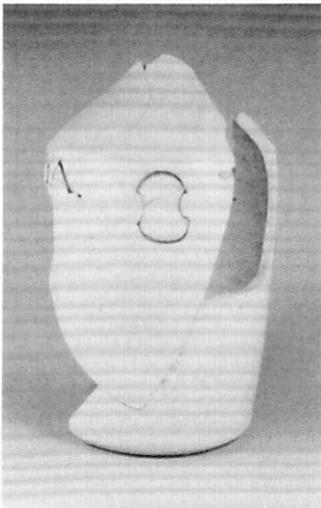
高台内の朱書き－中新町〇メ□印と思われる



高台内の朱書き－焼継師の印－〇平?

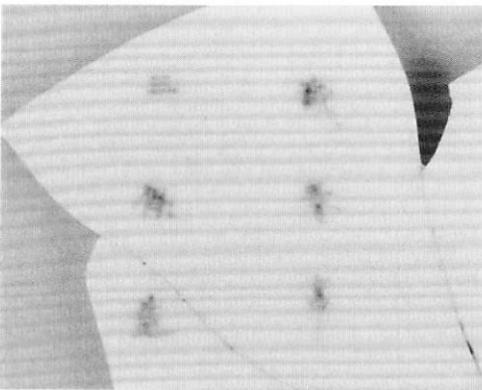


コンプラ瓶 (波佐見産) - 「1STE. SOOR. JAPANSCHZOYA」
(日本第一級の醤油の意)

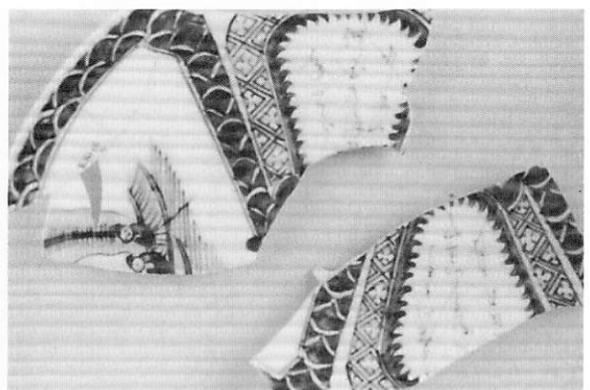


フンドウ印「8」染付

「JAPANSCHZAKY」(日本の酒の意)



「蔵春亭三保造」銘の磁器皿 (裏銘)



「蔵春亭三保造」銘の磁器皿 (表文様)

装幀

- 吹貫玄関。函館で最初に開かれた博物館の入口である。開拓使函館支庁仮博物館は、明治11年6月に竣工して翌年5月25日に開場し、函館仮博物館と呼ばれた。
和洋折衷木造建築で現存する博物館として最も古く北海道指定有形文化財となっている。
- 体裁は、明治23年6月に引継がれてきた合衆国博物館報告書のなかで最も古い1867年ワシントン発行のデザインである。

市立函館博物館研究紀要 第1号

1990年10月1日発行

編集・発行	市立函館博物館
☎040	北海道函館市青柳町17番1号 TEL 0138-23-5480
印刷所	有限会社 共立印刷
☎040	北海道函館市吉川町6番6号 TEL 0138-43-7650

BULLETIN
OF
HAKODATE CITY MUSEUM

No. 1

CONTENTS

Preface

H A J I M E C H I Y O : Yokoyama Matsusaburo's Life and Activities as
one of Japanese forerunners in photography and Western painting
on the basis of things owned by Hakodate City Museum.

Y O S H I N O B U T A H A R A : Hizen ceramics excavated at Goryokaku,
Hakodate magistrate's office of the Tokugawa Shogunate.

HAKODATE:

1 9 9 0